
けいおん Episode・SNOW

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん Episode・SNOW

【Nコード】

N7573P

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

霧生雪那の妹、小雪。小雪はある日、夢の世界で過去の自分と出会う。

小雪と白雪の新しい物語です。

第0話 小さき雪 白い雪（前書き）

六甲水「今回新しく始まった小説です。」

小雪「主人公は、私小雪と」

白雪「白雪です」

小雪「そういえば、恋愛じゃないんだね。」

六甲水「恋愛したいの？」

小雪「いえ、別に、」

白雪「Dark HEROではヒロインとして出てたけど、主人公に出れるなんて……」

六甲水「いい加減二人にも主人公として出したかったからね。まあ、他の作品での出番はかなり多いほうだからね。では、はじめます」

第0話 小さき雪 白い雪

これは夢。とても儂い夢を見ている。

その世界はすべてが真っ白で、地平線の向こうまで真っ白だ。私はこれが一発で夢だと分かった。

小雪「変な夢だな。何で何にもないんだろ？」

とりあえず、目覚めるために何とかしなければ、まあ、普通に起きようと思えば起きれるけど、何故かそれができない。全く迷惑な夢だ。

すると、急に目の前に黒い影が現れた。その影はだんだんと形を変え、それは、私になった。いえ、違う、これは……過去の私だ。

白雪「……………小雪お姉ちゃん」

小雪「私でいいんだよね。所で何でお姉ちゃん？」

白雪「……………私が姉じゃ、いやでしょ。一番お姉ちゃんみたいだし。それと、私のことは白雪って呼んで」

白雪は優しく笑って言う。そういえば、こんな表情出来るんだな。私。それにしても、何でまた白雪が……

小雪「そうかもね。それで、私に何か用？」

白雪「……………今の私は何をしてるのかわかって、毎日を楽しんでる？」

小雪「……………楽しいよ。私が『小雪』になった時からずっと、」

私は真剣な表情でいうと、白雪は寂しそうな表情をする。

白雪「いいな。私は楽しむことが出来なかった。だから、人を傷つけたんだと思う」

小雪「そうかもね。」

白雪「ねえ、お姉ちゃん。私のこと忘れていいんだよ。たまに夢見るんでしょ、あの時の」

あの時の夢。私が血まみれになり、近くには雪兄が倒れている夢。いまもたまに見ている。あんまり思い出したくないんだけどね。だけど、

小雪「忘れたいけど、私はあの夢のおかげで罪を覚えていられる。私が犯した罪は償えきれないかもしれない。忘れてしまってもいいかもしれない。けどね、それじゃあ、ダメなんだよ。」

私はそつと、白雪を抱きしめる。

小雪「罪があるから、『今』の私がある。罪があるから、『過去』の白雪がいる。それでいいんだよ。私たちは『今』と『過去』とそれと、『未来』があるからこそ、罪を覚えていられる。私は罪を数えて生きてるんだよ。」

白雪は私に抱きしめながら泣いていた。さらに、白雪の体はだんだんと消えていく。

白雪「ありがとうね。お姉ちゃん。てつきり、『過去』を忘れて、『今』と『未来』を生きて行くななんて思ったよ。」

小雪「我ながら変な考えもつね。でも、大丈夫だよ。あなたのこと忘れないから……………」

白雪「うん、ありがとう。あと……………」

目覚めるとそこは保健室だった。窓の外をみるともう日がおちている。私一体……………」

雪那「やっと起きたか。」

ベッドのそばには、雪兄が本を読みながら座っていた。

小雪「どうしたの？もしかして、保健室に連れ込んで私を……………」

雪那「お前、冗談でも殴るぞ」

雪兄は嫌そうな顔をしていた。とりあえず、事の顛末を聞くと……………
… 体育の時間、私は貧血で倒れてしまい、保健室に運ばれ、かなちゃん
が雪兄に知らせて、雪兄は私が起きるまでずっと待っていてくれたのだ。

小雪「そうだったんだ。」

雪那「もう、体は大丈夫か」

小雪「うん、大丈夫だよ。ちょっとたるいだけ。」

雪那「そうか。なら、」

帰り道、私は雪兄に背負われていた。この年でおんぶされるなんて

……

小雪「うう、恥ずかしいよ。」

雪那「また倒れられたら、嫌だからな。」

小雪「ふーん、重くない？」

雪那「……軽いほうだ。」

あ、雪兄照れてる。まあ、こんなに密着するのって結構久しぶりだし………そういえば、白雪に伝言頼まれてたんだっけ、一応言っとこ。

小雪「ねえ、お兄ちゃん。ありがとう。そして、大好きだよ」

私がそう言つとお兄ちゃんは、思いつきり、びっくりしていた。

雪那「な、なあああああああああああああ、お前やっばり熱あるだろ」

小雪「さあ、どうだろね。ねえ、お兄ちゃん。」

雪那「頼むから、その呼び方はやめろ。恥ずかしい。」

小雪「えへへ、大好き。」

ねえ、白雪。私はこうして、今を楽しんでるからさ。あなたも私と一緒に楽しもう。

その時、どこからか、優しい声で

「うん、わかった。私も楽しむ。」

その声を聞いて、翌日の朝。私が眠っていると突然、雪兄の叫び声が聞こえた。それを聞いて、私が雪兄の部屋に行くと、そこには…

……

雪那「な、な、な、小雪なんで人の布団に入り込んでるんだよ」

小雪「雪兄、私ここにいるよ。」

部屋の入口から私が言うと、雪兄は何度も私と布団にいる私を見比べ、

雪那「そうか、夢か。」

小雪「いや、私、ちゃんと起きてるから。」

雪那「じゃあ、このお前は誰だよ。」

小雪「私に聞かれても、」

二人で騒いでると、布団の中にいた私が目覚めると、

「おはよう、雪お兄ちゃん。小雪お姉ちゃん」

私はその姿に見覚えがあった。それは、髪は長いが、昔の私、白雪だった。

第0話 小さき雪 白い雪（後書き）

小雪「いきなり過ぎて、すじいね」

白雪「私もびっくりだよ。ちゃんと説明できるんですか？」

六甲水「それは、次回です。」

第1話 二人の雪（前書き）

六甲水「今年もあと少しで終わりか」

小雪「そうだね。」

白雪「……うん、もう終わりだね。」

六甲水「というわけで、今年が終わる前にEpisodes SNOW
の第1話上げてみました。今回は白雪についてです。」

第1話 二人の雪

私と雪兄は突然現れた私そっくりの少女とリビングで話を聞くこととなった。

雪那「それで、お前は何なんだ？」

白雪「…白雪だよ。」

小雪「白雪って、昔の私だよな。何でいきなり雪兄の部屋にいるの？」

私がそう聞くと、白雪はポケットからある手紙を渡した。雪兄がそれを読むと……絶句していた。

雪那「……………アホだ。」

小雪「な、何が？」

私は雪兄から手紙を奪い取り、手紙を読むと……

小雪「えっと、お母さんから手紙だ。『今、仕事で北海道にいます
が、ふたりとも元気？私の方は元気というか、あの馬鹿な夫が実は
……浮気をしていて、さらに、浮気相手の子どもまで出来ているら
しいです。お母さんの方は馬鹿なお父さんを精一杯殴るときますの
で、しばらくの間、貴方達の新しい妹の白雪ちゃんと仲良くしてね。
P s 白雪ちゃんのお母さんは病気で死んでいます。なので、これか
ら白雪ちゃんを家族として仲良くね。』……………アホだね。」

白雪「……はい、手紙の通り、これから家族になります。霧生白雪です。旧姓は内緒だよ」

雪那「はあ、あの親は勝手なことを……まあいいや。家族として白雪を迎えるとして、俺はもう学校行くからな。こゆもいい加減行くぞ」

小雪「あ、うん。」

そう言つて、雪兄は自分の部屋に戻つていった。私は白雪にまだ聞きたいことがあった。

小雪「それで、あの手紙は本当なの？」

明らかにこんなことがあるはずがない。絶対にあの手紙は嘘だと思えてしまう。なので、私は聞いてみた。すると、白雪は、優しい表情で……

白雪「……ううん。私はお姉ちゃんがみた夢の私だよ。」

やっぱり、でもあれは夢の出来事。なのに居るはずのない私がいるなんて……

白雪「私は、お姉ちゃんのもうひとつの人格としてずっと眠ってたんだよ。知ってる？二重人格って」

二重人格。ある程度のことなら聞いたことがある。確か、心の病で生まれたもうひとつの人格。渡しの場合、白雪に当たるんだよね。

白雪「本当は、あの時の夢で、私は消えるはずだったんだけどね。」

小雪「消えるって？」

白雪「お姉ちゃんは過去を受け入れて、今を生きてるということを知れたんだよ。だから、私みたいな人格は必要ないかって、お姉ちゃんが私の永久に覚えていてくれるなら、それでいいかって、そう思っつて、眠りについたんだけどね」

最初は悲しそうな表情をしていた白雪だが、だんだんと笑顔に変わっていった。

白雪「突然、変な光を浴びたと思ったら、私は家の前にいたんだよ。それで確信した。私にも命をもらって、お姉ちゃんと一緒に道を歩めるんだって、嬉しかったよ。すごく嬉しかった。」

小雪「白雪。」

私は白雪を抱きしめた。理由は簡単だった。嬉しかったからだ。

小雪「これからよろしくね。白雪」

白雪「うん、よろしくね。お姉ちゃん」

この日、私に妹ができた。けど、本当に白雪が現実に現れた理由はまだ分からないが、私にはわかる。きつとこれは、神様が奇跡を与えたんだと……

雪那「こゆ、いい加減、学校行くぞ」

着替えを終えた雪兄がリビングに戻ってきた。そういえば、白雪が来たことで、いきなり家族会議が始まったから、学校に行くのが遅れることになったんだっけ。時間的にもう二限目が始まる頃だ。

小雪「私も着替えなきゃ、」

白雪「学校か。私も行きたい。」

雪那「へ、」

学校生活まですごいことになりそうだった。

第1話 二人の雪（後書き）

六甲水「というわけで、白雪ちゃんが現実に出現した理由でした。」

白雪「……結局、私の理由は神様の奇跡なの？」

六甲水「神〃作者だよ。」

小雪「作者さんは神と言っても、邪神だよ。白雪、気をつけな。」

白雪「…うん。」

六甲水「まあ、理由はただ単に思いつかなかったもので、一番王道っぽいかなって理由だね。」

白雪「……そうなんだ。」

六甲水「ちなみに、雪那さんと梓はまだ付き合っておらず、小雪ちゃんは一年生で、雪那は二年生っていう設定だよ。」

小雪「ということは、」

白雪「え、え、」

小雪「二人をくっつけようが始まるの？」

六甲水「そっだよ。」

白雪「…楽しみ。」

小雪「ちなみに、私と白雪は、巫女服です。」

六甲水「大晦日だし、あと少して正月だからね。 臯くんの所に……」

白雪「…勝手に名前使っちゃだめだよ」

小雪「次回は、白雪が学校に潜入です」

第2話 白雪、学校に行く(前書き)

六甲水「今回はあの鮮血先生の臯くんが登場します」

雪那「許可もらったんだろっつな」

六甲水「もちろん。さらに白雪も学校に来ます。」

第2話 白雪、学校に行く

雪那「というわけで、大丈夫ですか？」

雪兄が職員室に行き、白雪が学校見学をしていいかという許可をもらいに行った。私と白雪は職員室の扉の外で一緒に待っていた。

小雪「それで、本当に学校に通うの？」

暇そうにしている白雪に質問してみると、白雪笑顔で言ってきた

白雪「……まあ、通うつもりだけど、一応お母さんに許可をもらったし、」

小雪「そういえば、お母さんは白雪のこと知ってるの？あの手紙は嘘だったんだよね」

白雪「ん、知ってるよ。筆跡だってお母さんのだし、普段から家にいないけど、お母さんはかなりすごいよね。」

確かに、私たちのお母さんはかなりすごい。どれぐらい凄いかっていうと、高校時代はかなりヤンチャで、いろいろやらかしたり、私……もとい白雪がいじめられていた時には、学校に乗り込んで校長や担任にイジメ問題について、4時間ぐらい語り合ったらしい。お母さんは冷静であり、かなり頭が切れる。

小雪「じゃあ、学費とかお母さん払つといたんだ。」

白雪「……うん、かなりすごいやり方だね。」

小雪「そうなんだ。それにしても、お腹すいたね。」

時刻は12時丁度、まだ雪兄は戻ってこない。私も朝から何も食べてなく、いい加減おなかがすいてきた。

白雪「……そうだね。御飯食べてくればよかったね」

二人揃って、溜息をつくとき、見知った人がこっちにやってきた。それは……

梓「あれ？小雪ちゃん。どうしたの？職員室の前で……それに、そっちの小雪ちゃんにそっくりな娘は？」

この人は、中野梓さん。私たち兄妹の幼なじみで、雪兄が好きな人でもある。実際頑張って二人をくっつけようとしてるけど、あんまり成果がない。

小雪「梓姉、ちょっとね。あ、この子は私の妹の……」

白雪「白雪です。いつも兄がお世話になってます。」

梓「うん、よろしくね。って、小雪ちゃんに妹なんていたっけ？」

小雪「えっと、お父さんの愛人の子で、事実上、私の妹に……」

私が白雪がついた嘘を言うと、梓姉は私たちを何故か涙目で見ている。

梓「そうだったんだ。白雪ちゃんも大変だね。」

白雪「いえ、大丈夫です。それより、お姉さんはこんな所でどうしたんですか？」

白雪が梓姉がこんなところにいる理由を聞くと、梓姉は……

梓「えつとね、皆で購買に行った帰りなの。あ、ほら、憂〜、臯〜、義亮〜」

白雪視点

お姉さんが友だちの名前を呼んだ瞬間、お姉ちゃんが全速力で、臯と呼ばれていた男の子の所へ行き、思いつきり、抱きつきに行った。

小雪「臯く〜ん」

臯「うわ、こ、小雪ちゃん。いきなり抱きつかないで、」

バランスを崩し、二人はそのまま倒れてしまった。お姉ちゃんは倒れたのも構わずに、臯さんに抱きついてる。

白雪「えつと、どういうことですか？お姉さん」

梓「え〜と、なんていうか、見たままだよ。」

見たままって、なるほど、お姉ちゃんはその臯さんにベタぼれですか。

雪那「ふう、やっと、終わった。って、何、この状況」

職員室から出てきたお兄ちゃんの第一声がそれでした。

第2話 白雪、学校に行く(後書き)

小雪「臯くん、大丈夫?」

臯「大丈夫だけど、裏月の方は?」

裏月(あのまま、眠っちまうところだったぞ。)

六甲水「というわけで、臯くんの登場だね。」

小雪「裏月くんとか出るんですか?」

白雪「……出さないと怒ります」

六甲水「出ますよ。多分、次の次ぐらいには、ちなみに、白雪ちゃん、家族にはお姉ちゃんとかお兄ちゃんなどのちゃん付けで、他の人には○○おにいさんとかお姉さんという呼び方です。ちなみに、小雪ちゃんたちのお母さんと六華さんも登場予定です。」

臯「あれ?僕の呼ばれ方が、さんに……」

六甲水「それも追々に、では、次回。感想などもよろしく願います」

第3話 恋の始まり（前書き）

六甲水「久々の投稿です。」

小雪「遅かったね。どうしたの？」

六甲水「何か色々と書きたくなったからね。とあるシリーズとかなのは関係とか、」

白雪「……………書ききれなの？」

六甲水「多分。とりあえず、今回の話は、小雪ちゃんが泉くんの事を好きになった理由についてです」

第3話 恋の始まり

白雪視点

私の学校案内をする前に、雪お兄ちゃんがみんなで昼ごはんでも食べようと話になったので、今私たちは学校の屋上にいた。ちなみに小雪お姉ちゃんは、臯さんにべったりくっついていた。

臯「あの、小雪ちゃん。その、くっつきすぎじゃ……」

小雪「コレぐらい普通だよ。ね、雪兄」

雪那「ん、まあいいんじゃないのか」

雪兄は二人を見てニヤニヤしながら答えた。

小雪「臯くん」

憂「小雪ちゃんと臯くんラブラブだね」

憂お姉さんは笑顔で言ってるけど、後ろに嫉妬のオーラがピンピンと感じるのは気のせいですよね。

梓「憂、最近怖いよ。」

憂「えっ、何が？」

梓「いや、何でもない。」

あ、梓お姉さんも感じたんだ。というか女性なら誰でも感じるよね。義亮「それにしても、白雪ちゃんって、小雪ちゃんに本当にそっくりだよな。本当に義理の妹なのか？」

義亮さんはパンを食べながら聞いてきた。とりあえず私は適当な理由で答えた。

白雪「それ、お母さんにも言われました。まあ、私と会ったとき、お母さん『何、娘にそっくりな子を産ませてるのよ。アホなの？』って言いながらお父さん殴ってましたもん」

雪那「父さん、次会うとき顔の原型留めてるよな」

雪お兄ちゃんは空を見ながら言った。私たちのお母さんって怒らせると怖いから………小雪お姉ちゃんに至ってはまだくっついてるし………何とかかなり恥ずかしい。

白雪「お姉ちゃん。あんまりくっついてると臯さん御飯食べられないですよ」

小雪「あ、そうだね。ごめんね、臯くん」

臯「いや、別に気にしなくって大丈夫だよ。」

そついえば、お姉ちゃんが臯さんの事好きになった理由って何なんだろう？

白雪「ねえ、お姉ちゃん」

小雪「何？白雪」

白雪「お姉ちゃんが臯さんの事好きになった理由って何？」

私がそう言つと、お姉ちゃんは顔を真赤にしながら……

小雪「うんと、いきなりキスされたからだよ。」

お姉ちゃんの発言を聞いた瞬間、私とお姉ちゃんと臯さん以外は、臯さんを軽蔑な眼で見っていた。

義亮「臯、お前、そんな奴とは」

梓「臯つて、そういう人だったんだ」

憂「……………臯くん」

雪那「人の妹にいきなりキスするなよ」

臯「いやいやいやいや、違うからね。僕は小雪ちゃんにキスしてないから。というか、雪那も理由知ってるじゃん」

雪那「まあ、一応な。」

白雪「どういった理由なんでしょうか？臯さん」

臯「えつと、あれは、二ヶ月前にだよな」

雪那「ああ、こゆと二人でデパートに行ったとき、こゆのやつが迷子になってな。」

お姉ちゃん、二ヶ月前って、中学卒業しての春休みだよ。お願いだからいい年して迷子にならないで……というか、記憶共有してるはずなのに私全然覚えが無いけど……

小雪「それで、困ってた私のところに皐くんと出会ったんだよ」

皐「うん、雪那から小雪ちゃんの事聞いてたから、一発で分かったんだよ。それで、事情聞いてしばらくの間一緒にいたんだ。」

小雪「それからかな。皐くんのこと気になりだしたのは。」

うーん、本当に記憶にない。そういえば、私が目覚めたのも二ヶ月前だったような……なにか関係あるのかな？

その後は、学校案内をしてもらい、家に帰った。私も来週から学校に通うことになった。でも、その日の夜、ある出会いがあったのだ。

第3話 恋の始まり（後書き）

六甲水「こんな感じかな。」

小雪「何とか普通な出会い方だったような」

六甲水「気のせいだよ。次回は白雪の夢のなかで、あの人と出会います」

小雪「感想待ってまーす

キャラクター紹介（前書き）

六甲水「今回は小雪ちゃんと白雪のキャラクター紹介です。小雪ちゃんの場合は前に紹介しましたが、少し改変させます」

キャラクター紹介

キャラクター紹介

霧生小雪きりむぎⅠ

雪那の妹で、お兄ちゃん大好きっ子。明るい性格だが、寂しやがり
で、雪那がどこかへ行くと付いて行きたがる。

梓とも幼なじみで、梓の恋愛相談に乗る。髪は黒髪セミロング。過
去の名前は『白雪』。中学一年の時にいじめにあい、精神的に弱り始
め、いじめていた女生徒を襲撃する事件を起こす。だが、雪那と霧
島先生の働きで自分の過ちに気がつけた。それ以来、自分は罪を背
負って生きるため、新しく生まれ変わるために小雪と名前を変えた。
皐のことが好きで、いつも抱きつく。白雪とは同一人物だが、小雪
のある感情がきっかけで白雪を目覚めさせ、今は姉妹として暮らし
ている。成績は兄の雪那と比べて駄目だが、運動神経はかなり良い。

CV 柚木 かなめ

代表作 リトルバスターズ！ エクスタシー 西園 美鳥

霧生小雪きりむぎⅠ

雪那の妹で、小雪の過去の姿。大人しい性格で小雪よりかなり寂し
やがりで、いつも小雪か雪那のそばにいる。雪那や梓達には、父親
の愛人の子供だと言っているが、実は、小雪のもう一つの人格であ
るが、小雪には自分が必要がないと思い、小雪が夢で出会うまで
ずっと表に出ずにそのまま、消えて行くはずだったが、小雪のある感
情がきっかけで、小雪と夢で出会う。さらに、小雪が夢だけではな

く、現実も楽しんで欲しいという願いで、現実には白雪として生まれる。事情を知っているのは、霧生家の女性陣と皐と裏月などの一部である。髪は白髪ロング。皐の事を尊敬していて、裏月の事が好きだが、小雪みたいに抱きついたりするのが恥ずかしいが、頑張つて抱きつこうとしている。さらにたまに他の人の夢に入ることができららしい

CV 柚木 かなめ

代表作 リトルバスターズ！ エクスタシー 西園 美魚

霧生雪奈^{きりゆつゆきな}1

霧生家の主であり、小雪達の母親でもある。普段から家を開けることが多いが、何の仕事をしているかは子供たちは知らない。現実世界に現れた白雪を最初に見つけて、娘にしてしまうほどの器でもある。退屈を嫌っており、面白いことのためなら何でもするらしい。皐と裏月の事は、早く娘たちと結婚して欲しいと思っている。ちなみに、六華と言音は、雪奈の命を狙ったがあっさり返り討ちにあい、今は雪奈の護衛をしている。

在沢桜^{あじさわさくら}1

小雪と白雪の友達で、白雪の正体について知っている。小雪と白雪を過去にいじめていたが、今はそれらを反省し、親しく接している。今はレディース雪柱の二代目総長（レディースとは言っても、過去のことがあり今は街の安全を守っていたりする。ちなみに初代は雪奈）雪那の事が好きで、よく小雪の事についてという理由で仲良くしようとしているが、梓に妨害されていたりする。

キャラクター紹介（後書き）

六甲水「以上が、キャラ紹介といたいたいですが、まだ出てないキャラが居るので、出したら、増やしていくつもりです。」

雪奈「早く私を出してほしいわ」

六甲水「まだですよ。というか、勝手に出ないでください」

白雪「……次回は夢のお話です」

第4話 夢の出会い（前書き）

六甲水「第4話です」

雪那「近日中って言うておきながら、かなり日にちが立っている気が……」

六甲水「いや、そんなに立ってないような……」

小雪「普通なら上げた次の日とかじゃないのかな？」

六甲水「すみません。今回は白雪ちゃんと裏月くんメインです。」

六華「全くもってけいおん要素がないような……」

六甲水「気のせいです。」

第4話 夢の出会い

これは……夢。私は今夢のなかにいる。その夢の世界は白い世界と黒い世界の二つに分かれている。

白雪「これって、お姉ちゃんの夢じゃないよね。」

私が現実世界に来てから身についたのか、たまに他人の夢のなかに入ることができるようになった。けれど、その条件はかなり難しい。それは、私と波長が合わなければならぬ。お姉ちゃんの場合は元々同一人物だから入ることが出来るが……今回は一体……

白雪「お兄ちゃんの夢ってわけじゃないよね。誰の夢だろ？」

とりあえず黒い世界に入ってみることにした。すると、そこに一人の男の子がいた。

白雪「……………臯さん？」

裏月「あん？誰だお前は……………こんな奥深くに来るなんて……………」

違う。見た目は臯さんにそっくりだけど、中身が違う。この人は一体……………

白雪「……………私は霧生白雪。あなたは？」

裏月「いきなり自己紹介とか、はあ、俺には名前なんてない。俺は……………」

白雪「臯さんの影みたいなものですか？」

裏月「くっ、白雪。お前分かってるなら質問するな」

そっくりさんは額に手をやった。感じ的には怖そうな人だけど、話す結構面白い人だと分かった。

裏月「それで、お前は何でここにいるんだ？」

白雪「……さあ？臯さんの夢のなかだと思ったんですけど、違うの？」

裏月「夢の中か。まあそうであり、そうではないな。今頃臯の奴は夢の中でのんびりしてるだろうな。というか、俺もこうして、誰かと話すのも久しぶりだからな」

そっくりさんは少し寂しそうな表情をしていた。そういえば、私もお姉ちゃんの中にいたときはこんな顔をしてたんだろうな。

気が付くと世界がだんだんと透けていく。どうやら目覚めの時間らしい。

白雪「……それじゃあ、私は帰るね。えっと……」

裏月「悪いが、名前はないって言ったよな。好きなように呼べ」

白雪「……いえ、今度会うときに考えておくね。じゃあ、また」

目覚めは悪かった。夢がどんな内容だかわからない。

白雪「でも……………不思議な夢だったような……………」

確かに目覚めは悪かったけど、でも、なんだか心の中があたたかい気持ちで満たされていた。

白雪「ど、どうしたんだろ？私……………誰かに恋してるのかな？」

そう、この気持は……………正しく恋だった。

第4話 夢の出会い（後書き）

六甲水「第4話で……ぎゃあああああ」

裏月「話が短すぎだ。それに今回白雪と折れしか出てないし」

白雪「……………二人つきり……………」

雪那「まあまあ、白雪も嬉しそうだからいいじゃないか。あつちなんか大変だぞ」

裏月「あん？」

小雪「臯くん。二人つきりになる」

臯「いや、それは作者さんに頼んだほうが……………」

小雪「違うよ。お話の中じゃなくて、この感想の世界で、だよ。ほら、あつちの角の方で……………」

臯「ほら、僕らも帰らなきゃ……………」

小雪「こんな時のために、さつき裏月くんから臯くんを好きにしたい言われたから大丈夫」

臯「裏月、まさか、僕を……………」

裏月「まあ、頑張れ。雪那。白雪と一緒にあつちに行くか？」

雪那「そつだな。行くか。白雪」

白雪「……うん」

六甲水「次回は、海にでも行きます。」

第5話 テストとお母さん（前書き）

六甲水「今回は夏休み前のテストと霧生家の母親がやっと登場」

雪那「前回、海に行くとかいってなかったか？」

六甲水「いや、そういうば、白雪の学校生活とかやってなかったな
って」

小雪「えー、海はおあずけなの？せっかく水着買ったのに……」

六甲水「とりあえず、始まります」

第5話 テストとお母さん

小雪「臯くん、結婚して、」

臯「えっ、」

いきなり教室に入ってきた小雪が臯の手を握りながらそう言った。何でこんな事が起こったかは数分前……

1年2組

私とお姉ちゃんがいる教室だ。だが、いつも元気なお姉ちゃんはこの日、ものすごく落ち込んでいた理由は……

小雪「うう〜、テストやだよ〜」

桜「小雪ってそんなに勉強駄目だったけ？」

白雪「……お姉ちゃんは運動は出来るけど、勉強は苦手みたいなんだよ」

この子は、お姉ちゃんの親友である在沢桜。黒髪ロングにクールな目付き、頭の上には真っ白なリボンをつけている少女で、お姉ちゃんの中学校からの友達。そう、私たちを受け入れてくれた大切な友達だ。もっとも、その時の話はまた機会があつてからだ。

桜「まあ、テストまでまだ日にちあるから頑張って勉強しよう」

白雪「……頑張る。お姉ちゃん」

ちなみに、私はお姉ちゃんよりそれなりに勉強できるから、多少教えることができる。だけど……

小雪「……ばいんだ」

白雪&桜「えっ?」「」

小雪「臯さんと結婚すればいいんだ。それで、私は専業主婦としていればテストなんて受けなくて済むんだよ。ちょっと、結婚してくる」

そう言っつて、教室を出て行くお姉ちゃん。というか……

白雪「……暴走してるけど止めなくっていいのかな?」

桜「止めたほうがいいね」

私と桜はお姉ちゃんを追いかけ、お兄ちゃん達の教室に着いた。案の定お姉ちゃんは臯さんに結婚を迫っていた。

白雪「失礼します」

雪那「白雪。何か暴走してるんだが、」

白雪「お姉ちゃん、テストが近いから」

桜「ご迷惑をお掛けしました。行くよ、小雪」

小雪「ええ、まだ返事を聞いてない」

桜「はいはい、それは後にしようね。」

桜はお姉ちゃんの腕を掴み、そのままお姉ちゃんを引きずりながら教室に戻っていった。

皐「えつと、一体何が……………」

雪那「まあ、憂達がいなくてよかったな。」

皐「ん、まあ、そうだね」

その後、桜が見張る中で勉強会を開き、何とかテストが終わった。そして……

皐「え、海に？」

小雪「うん、テストが終わったからパーと遊ぼうよ。出来れば二人っきりのほうがいいんだけど、皆で行こうって話だから、どうかな？」

放課後帰る途中、廊下でたまたま会った小雪ちゃんに海へのお誘いを受けた。確かにテストも終わったからいいかもしれない。

皐「いいよ。」

小雪「分かった。それじゃあ、また明日ね」

皐「うん、また明日。」

こうして、今度の休みに皆で海に行くことになった。けど、まだある困難が残っていたのだった。それは、久しぶりに兄妹で家に帰ってきたときのことだ。雪兄が家の扉を開けるとそこには……

六華&言音「おかえりなさい。」

扉を閉める雪兄。一体どうしたんだろ？

小雪「雪兄どうしたの？」

白雪「家は合ってるよ」

雪那「いや、何か変なモノを……………」

小雪「あはは、変なモノって……………」

そう言つて、扉を開けると……………」

六華&言音「おかえりなさい。お嬢様」

確かに変なモノだった。何故か玄関の前に見知らぬ男女がいた。一体この人達は…………いや、この人達の正体を考えるよりこんなことになつた原因が分かつていた。

雪奈「あら、おかえり、三人とも」

リビングから出てきたのはそう、私たちのお母さん、霧生雪奈だった。

雪那「母さん帰つてたんだ。」

雪奈「ええ、ついさつきよ。」

小雪「ちなみに、この二人は？」

雪奈「私のペット……………護衛よ。」

そう、私たち家族の主である母親が帰つてきた。それも変なおみやげ付きで……………一体どうなるんだろう

第5話 テストとお母さん（後書き）

六甲水「ようやく出せたよ」

雪奈「やっと登場できたわね。それもペツ……六華さん達も」

六華「……………」

言音「……………」

雪奈「あらあら、恥ずかしがってるのかしら？」

六甲水「いや、ちがうとおもう。」

桜「私の紹介は？」

六甲水「忘れてた。小雪ちゃんと白雪の過去を知っていて、白雪の正体も知ってる桜ちゃんの登場です」

桜「こんにちわ」

雪奈「いつも、小雪がお世話になってるわ」

桜「いえいえ、友達ですから、」

皐「本編に絡むんですか？」

雪奈「ええ、もちろん。色々と楽しみだわ」

臯(何々ねるんだらじっ)

第6話 母の優しさ（前書き）

六甲水「今回はお母さんの話です。」

小雪「海〜」

六甲水「次回は無理だけど、次回はついに……」

小雪「何？」

六甲水「それは今回の話を見てから」

第6話 母の優しさ

朝、目覚めると少しいい匂いがしてきた。普段なら雪兄や白雪が朝食を作っているけど……今回は少し懐かしい音が聞こえていた。

雪奈「あら、今日は早いわね。小雪。」

台所にはお母さんが朝食を作っていた。そうだ、昨日の夜、お母さんが帰ってきたんだ。

小雪「おはよう。お母さん。雪兄と白雪は？」

雪奈「二人ともまだ寝てるわ。」

私は時間を見るとまだ6時過ぎ、普段は当番制にしてるため朝食つくくる人は大体この時間に起きて、他の二人は7時くらいまで寝てる。

小雪「今日は、雪兄が当番じゃなかったっけ？」

雪奈「あの子、夜遅くまで勉強してたからね。ゆっくり寝かせましょ。それに私が家にいる間は家事ぐらいしないよね。」

お母さんは優しい笑顔で言ってきた。こうしてお母さんが家事をする姿を見るのはいつぐらいだろ……………

小雪「そういえば、六華さんと言音さんは？」

昨日の夜、お母さんのボディガードをしている六華さんと言音さ

たがるんだった。というか、今日デートなんて……

雪奈「それじゃあ、頑張るのよ」

うう、普段どおりに行けば……そう普段どおりに行けば大丈夫だ。

こうして今日、私は皋くんとデートをすることに……うれしいけど、ちょっと恥ずかしい。

第6話 母の優しさ(後書き)

六甲水「デートねえ、」

白雪「……デート」

小雪「うう、初デートだよ。というか臯くんよくOKしてくれたね」

臯「いや、いきなり雪那の番号から女の人の声がして、強制的に…

……」

六甲水「小雪ちゃんは嬉しくないの？」

小雪「うれしいけど、お母さんと私は似てるから……絶対何かするはず。そう思うと……はあ、」

臯「大丈夫だよ。僕が守ってあげるから」

小雪「臯くん。ありがとう」

白雪「……私もデート」

六甲水「まだ裏月くんが出てこないからね。今度、短編で書くよ」

白雪「……嬉しい。」

第7話 初めてのデート（前書き）

六甲水「今回は二人のデートだね」

雪那「海いく話はどうしたんだ？」

六甲水「それは次回。」

雪那「本当だな？」

六甲水「多分」

第7話 初めてのデート

私は、お母さんの策略?によって臯くとデートすることによって……でもデート自体はいいけど、かなり恥ずかしい。私は駅前で待ち合わせをしている

小雪「ま、まだかな？」

私はお気に入りの白いワンピースを着て臯くんを待っている。すると、臯くんが向かいの道から来てくれた

臯「お待たせ、少し待ったかな？」

小雪「ううん、私も今来たところだよ」

臯「とりあえず、どこか行きたいところある？」

小雪「臯くんに任せるよ」

私たちはどこかのお店に入ろうと歩いて行った。

そして、私達の後方に三つの影があった。私や臯くんは気づいていない。ただのその三つの影は……

雪奈「あらあら、そこはまずは喫茶店でしょ」

白雪「……お姉ちゃん服気合入ってるね」

雪奈「そりゃ、デートだもん。気合入った服を着ないと……」

雪那「あのさ、わざわざ後を付ける意味あるのか？」

雪奈「全くあなたは……妹の晴れ舞台よ。ここはこっそり見守らないと」

白雪「……そつだよ。お兄ちゃん」

雪那「モノ好きな………おっ、二人とも洋服店に入ったぞ」

雪奈「じゃあ、私たちも付けるわよ」

とりあえず、私は今度行く海のために水着を買うことにした。

皐「あの、何でまた水着なの？」

皐くんは少し恥ずかしそうにしている。とりあえず普段どおりに……

……

小雪「今度海行ってくつて言ったよね」

皐「うん、小雪ちゃんは水着持ってないの？」

小雪「うん、スクール水着しかなくって……………」

過去に色々であったせいで友達と海に行くことは無かった。こういう時にこそ、水着を買わないと……………」

雪奈「バカね。ここはあえてスクール水着で勝負を挑むのよ」

白雪「……………私も水着買おうかな？」

雪那「白雪のやつはあとで買ってやるから」

雪奈「白雪はスク水よ。きっと似合うわ」

雪那「似合うとかの問題より、新しく買ってあげないと駄目だろ」

小雪「臯くん。選んでもらっていいかな？」

臯「え、その、僕が選んだ奴でいいの？」

小雪「うん、私は臯くんが選んでもらった奴が着たいな」

臯くんはしばらく水着を見て、白いワンピースの水着を選んでくれた。

臯「これじゃあ、だめかな？小雪ちゃんにきくと似合うと思うけど」

……」

小雪「ありがとう。えへへ」

雪那「臯の奴。いいやつ選んだな」

白雪「……きつと、お姉ちゃんの好みを知ってるからだよ」

雪那「あいつ、白好きだからな。白雪はどれがいいんだ？」

俺と白雪は折角来たので水着を選んでいた。母さんに至ってはまだ監視をしている。この人とりあえず、六華さん達に言っただけで帰ってもらおうかな？すると二人に近づいてくる二つの影があったそれは……

唯「あれ、コウくとゆきちゃんだあ」

律「二人して何やってるんだ？」

そこにいたのは雪兄の部活の先輩である律先輩と臯くんの居候先の先輩の唯先輩だった。

臯「唯姉、それに律さん。二人ともどうしたんですか？」

律「いや、それは私が聞きたいよ。女性用の水着売り場に何でいる

のかつて……私たちは水着買いに来たんだよ。二人は……なるほどな。」

律先輩は私が持っている水着を見て何かを感じていた。この人意外と鋭いから、

律「邪魔して悪かったな。それじゃあ……」

唯「もしかして、二人ともデート？いいな」

律先輩が気をきかせて、どこか行こうとした瞬間、唯先輩がそんな事を言い始めたせいで私たちは急に恥ずかしくなった。

雪奈「二人とも顔真つ赤よ」

雪那「とりあえず母さんどうする？」

白雪「……六華さんに言って連れて帰ってもらおうか」

梓「あれ？ゆき、なにしてるの？」

とりあえず六華さんに電話しようとした瞬間、梓によって発見された。さらには……

唯「あれ、あずにゃんだ。それに、せつちゃんとしーちゃんだ」

唯先輩に発見される始末。母さんはいつの間にか逃げ出してるし、こゆに至ってはちょっと怒っている。これは後で何か買ってあげな

いといけないな。

その後、雪兄達と合流して皆で遊ぶことになった。折角のデートが台無しになったと最初は思ったけど、こうしてみんなと遊べるからいいかな。そして、帰り道。雪兄は唯先輩と律先輩と梓姉を送っていき、私と白雪は臯くんを送ってもらうことに……

臯「雪那のやつ。同じ家なのに何で僕に任せるんだろう？」

白雪「……それは……」

小雪「ちょっとしたお詫びだと思うよ」

私がそう言うと臯はきよとんとした顔をした。雪兄はこういう所が気が回ってくれるから嬉しい。

そんな時だった。私はあるものを見てしまった。それは……一匹の猫が何匹もの犬にいじめられているところを……

小雪「あっ……」

私はその場で立ち止まってしまった。あの風景は過去の私と重ねてしまった。白雪は私と同じように最初立ち止まってしまったけど……何とか一歩進むことが出来た。でも、私は……進むことが出来ない。

皐「小雪ちゃん？どうしたの？」

皐くんの声で私は我に帰った。振り向くと皐くんは私のことを心配している。私はいつもの笑顔で返した。

小雪「なんでもないよ。私たちはここまででいいから、ありがとうね皐くん」

皐「う、うん。また」

私は白雪の手を握り、走っていった。今すぐこの場を去りたくって

……

皐「小雪ちゃんどうしたんだろう？」

????（どうしたんだ？皐。小雪のことが心配か）

皐「うん、なんだかさっきの小雪ちゃん、様子おかしかったし……」

????（あとで電話でもしてやるんだな。ただ俺はあっちの白雪が気になるけどな）

皐「何で？」

????（ちょっとな）

第7話 初めてのデート（後書き）

六甲水「次回は必ず海に」

雪那「そういえば、この時点で裏月のこと知ってるのは、だれもないのか？」

六甲水「いや、憂と雪那だけだよ。次回はそれについてやりながらと小雪ちゃんのことについてもやりたいから。小雪ちゃんの過去を聞いて臈はどうするのかとか」

裏月「雪那と中野の仲がどうなるかもな」

第8話 海でドキドキ（前書き）

六甲水「今回こそは海へ行く話です」

小雪「やっとだね。」

白雪「……うん、そうだね。」

六甲水「まあ、今回はイチャイチャっぷりがすごいかもしれないし」

小雪「誰との？」

六甲水「それは見てからのお楽しみ」

第8話 海でドキドキ

電車に揺られること2時間ちよと、私達はずいに海へ行くことが出来ました。

小雪「わあ、海だよ。海。きれいだよ白雪」

白雪「……うん、凄い綺麗だね。」

雪那「あんまりはしゃいでると疲れて海に行く前に寝ちまうぞ。こゆ」

小雪「寝ないもん。だって、今日は……」

私は向かいの席に座る臯くんを見た。今回海に行くメンバーは私と白雪、雪兄、臯くん、梓姉、桜ちゃん、そして保護者としてお母さんの7人で行くことになりました。本当は憂姉や霧兄も誘いたかったけど、用事があるらしく無理だったのでこのメンバーで行くことになりました。ちなみに六華さんや言音さんはお仕事があるらしく来られなかった。

小雪「ねえ、臯くん。海綺麗だよ。」

臯「う、うん。そうだね。」

今日の臯は少し様子おかしかった。何か私のことじっと見てたりするけど……もしかして私の顔に何かついてたりするのかな？でもそれだったら白雪や雪兄が行ってくれるはずだけど……

しばらくして私たちは電車を降り、近くの旅館に着いた。旅館はお母さんが予約取ったらしいけど、何というか結構豪華な場所だった。そのことをお母さんに聞いたが……

雪奈「企業秘密よ」

一体どんな方法で予約取ったんだろう？とりあえず私は早く着替え海に行くことにしたのだった。

俺と皐はさっさと着替えを済ませてパラソルやらの準備をしていた。

皐「皆遅いね。」

雪那「まあ、女子は着替えに時間がかかるっていうし、というか皐。」

皐「ん？何？」

雪那「まあ、夜部屋で聞こうと思ったけど、絶対にこゆとかが部屋

に来そうだから今聞くけど、あっちのお前はこゆにバレてたりしないよな？」

臯「え、うん。ここ最近表には出てこないからバレてないけど、何で？」

雪那「ん、まあ、バレててもいいけど、こゆの場合ちょっとな。」

小雪「臯くん。」

と話していたらこゆが走ってこっちにやってきた。他の女性群も歩いてきていた。

小雪「臯くん。水着似合う？」

臯「うん、似合うよ。」

小雪「えへへ、ありがとう。」

まあ、こゆの水着は臯の奴が選んだ奴だからな。次にこっちにやってきたのは白雪だった。白くて長い髪の上にちよつと大きめな麦わら帽子に俺が選んだ水色のワンピースの水着を着ている。

白雪「…………お待たせ。お兄ちゃん似合ってる？」

雪那「ああ、似合ってるぞ。」

裏月（うっ、確かに似合ってる。）

臯（どうしたの？裏月）

裏月（いや、何でもない。）

小雪「臯くん。早く遊ぼう」

臯「え、でも、皆待たないと……」

雪那「俺がみんなのこと待ってるから行って来いよ。白雪も行った
ら……」

白雪「私、泳げないからお兄ちゃんと一緒にいる」

雪那「ん、そうか。じゃあ、俺と一緒に行くか」

私と臯は一緒に海岸を探検していた。私たちは岩場の近くで座っていたのだった。

臯「ここってあんまり人がいないんだね」

小雪「うん、お母さんが言うにはベストスポットらしんだよ。だからあんまり人がいないみたい」

臯「へえ、そうなんだ。」

小雪「でも、私はこう人があんまりいないほうが好きだな」

皐「何で？」

小雪「何かこういう場所は綺麗なままであつて欲しいから。まあ、女の子もずっときれいでいたっていうのと同じだよ。でも、」

皐「小雪ちゃん？」

私は何故か涙を流していた。あんまり皐くに心配掛けたくないのに……

小雪「私は……身体は綺麗だけど、心は穢れてる。皐くんはそんな私でも……好き？」

なんでだろ。何でこんな事を皐くに聞いちゃったんだろう？早く誤魔化さないと……私はそう思い誤魔化そうと何か喋ろうとした瞬間、皐くんが抱きしめてくれた。

小雪「さ、皐くん？」

皐「僕はどんな小雪ちゃんでも好きだよ。だからあまり考え込まないほうがいいよ」

小雪「うん、うん。皐くん。ありがとう。でも、告白はちょっとやり直したいな。」

皐「何で？」

小雪「うーん、もうちょっとしっかり告白したいから、それに私告白するなら学校の屋上で皐くんを呼び出してドキドキしながら告白してキスしたいもん」

皐「そ、そうなんだ。」

小雪「だから、それまで皐くんも私のことが好きって気持ちは取っておいて、私、ちゃんと受け取りに行くから」

皐「分かった。」

この日、私は皐くと初めて手をつないで一緒に歩いたのかもしいない。

岩陰で皐と小雪の会話を聞いて影が会ったそれは……

雪那「あいつ、結構色々と気にしてんのな。」

白雪「えっ、何が？」

雪那「いや、誤魔化さなくていい。お前過去のこゆ……白雪だる。」

白雪「……お兄ちゃん気づいてたの？」

雪那「こゆと母さんは俺がお前の事気づいてないって思ってるけど、最初お前を見た時から気づいてたよ。」

白雪「そうなんだ。でもてっきりお兄ちゃん気づいてないと思ってたけど、」

雪那「いや、何でだよ。」

白雪「……だって、私のこと普通に白雪って呼ぶから、お姉ちゃんみたいにあだ名みたいなもので呼んでほしいなあ〜」

雪那「悪かったな。じゃあ、これからお前のことは『しい』な」

白雪「うん。」

俺と白雪「……いや、しいは梓と桜がこっちに来るのを見て合流したのだった。」

梓「ゆき、どこ行ってたの?」

桜「そうですよ。早くビーチボールやりましょつよ。」

雪那「分かった。しいもやるか?」

白雪「うん」

こうして最初の海は終わったのだが、旅館でまだあるイベントが残っていたのだった。

第8話 海でドキドキ（後書き）

六甲水「まあ、今回は少し裏月や白雪のことに触れたり、小雪ちゃんの過去についても触れたけど……… 皐くん、何で顔が真っ赤なの？」

皐「いえ、いくら励ますつもりで抱きついたりしたけど、結構恥ずかしいですよ」

雪那「まあ、告白してたからな」

小雪「えへへ、嬉しいな。」

白雪「……私もあだ名出来たから嬉しいな」

雪那「良かったな。しい」

白雪「うん。」

裏月「何か一瞬で俺が出てたけど………」

六甲水「まあ、いいじゃん。白雪の水着見れたから、次回は皐と小雪がこん………」

皐「一体何するつもりですか？」

六甲水「それは次回でわかるから」

第9話 温泉で…… 前編（前書き）

六甲水「久々の更新です。」

雪那「今まで何やってたんだ？かなり間空いたが……」

六甲水「違う方に集中してたから、あと仕事が忙しくって、」

雪那「それじゃあ、今度からは間空けずに書けるのか？」

六甲水「どうだろ？とりあえず、今回は温泉のはなしです。」

第9話 温泉で…… 前編

海で遊び終え、夜、俺と皐は二人脱衣所で服を脱いでいた。

皐「かなり疲れたね。」

雪那「そうだな。梓と桜の奴、本気でやってきやがって、しいの奴が体悪いのに……」

皐「あはは、雪那は妹思いだね。」

裏月（まあ、別の言い方をするとシスコンだけだな。）

雪那「皐、いや裏月。ちょっと出てこい」

俺は皐の頭を軽く叩くと、見た目は皐だが感じ的には少し違っている。皐のもうひとつの人格、裏月である。裏月はとある理由で生まれた。まあ、その話は後々……

裏月「あんだよ。シス那。」

雪那「誰が、シス那だ。というか、俺はシスコンじゃねえ、」

裏月「普通なら中野の奴といちゃついているのに、今日一日白雪にゾッコンじゃねえか。」

雪那「あ、あれは、アイツが体が弱いからだ。」

裏月「白雪はああ見えて、体丈夫そうに見えるけどな。やっぱりお

前シスコンだな」

雪那「というか、裏月。白雪の事気にし過ぎじゃねえのか？まさか……お前アイツのこと好きなのか？」

俺がそう言つと、裏月はかなり動揺していた。普段そついう姿を見せない裏月だが、珍しい。

裏月「ば、バーカ、そんなワケないだろ。まあ確かにアイツ可愛いけど……」

雪那&皐（あつ、本音が出てきた。）

雪那「まあ、兄弟して人の妹好きになりやがって、」

裏月「兄弟じゃねえ、たく、俺はもう寝る」

裏月から皐に変わった。とりあえず俺達は風呂に入ることにした。

風呂場は中の温泉と外には露天風呂がある。俺と皐は体を洗い、風呂に入った。すると皐があることに気がついた。

「あれ？雪那。首の所に傷跡があるけど、どうしたの？」

「ん、」

俺は首筋に手をやった。うっすらと首に切り傷らしきものがある。俺は苦笑いしながら答えた。

「まあ、ちよつとな。俺はもう出るけど、臯は？」

「ん、まあ、露天風呂に入りたいから、先に出てていいよ。」

「分かった。」

僕は外に出ると露天風呂があり、白い湯気で包まれており、一人だけ入っているのに気がついた。きっと、他のお客さんが入っているんだろうな……………

「はあ、いい湯だ。」

「ふえ？臯くん？」

何故か聞き覚えがある声が聞こえた気がしたような……………その時何故か湯気が一気に晴れ、そこにはタオル一枚の小雪ちゃんが……………

皐「……………」

小雪「……………」

何だろこの状況……………」

第9話 温泉で…… 前編（後書き）

六甲水「というわけで、次回に続きます。」

皐「////////////////////」

小雪「////////////////////」

雪那「皐、お前何、人の妹の裸見てるんだよ」

皐「何でマジ切れなのさ。」

裏月「まあ、俺が本格始動したからいいじゃねえか。」

白雪「うん、よかった。」

六甲水（まあ、とりあえずは、まだ夜のイベントが続くけどね）

第10話 温泉で…… 後編

露天風呂で皐が出会ったのは……タオル一枚纏った小雪だった。
小雪は顔を真赤にしていた。

小雪「……あの、さ、皐。あんまり見られてると……恥ずかし
んだけど、」

皐「あ、ごめん。」

皐は後ろを振り向き、湯に浸かった。

皐（な、何で、小雪ちゃんが男湯の方に……いや、ちがう。もし
かして、外だけ混浴になってるのかな？それでもまさか、小雪ちゃ
んがいるなんて……でも……なんというか……肌がすごく綺麗だ
ったな。）

皐はさつき見た小雪の裸体を思い出して、顔を真赤にしていた。白
い肌にお湯に濡れて肌に張り付いたタオルから分かる小雪のスタ
イルにドキドキしっぱなしだった。これは、襲うしか……

皐（何か、さつきからおかしな事を言っている気が……もしかし
て、作者さん、まさか……）

裏月（いや、作者じゃない。俺だよ。裏月だ。）

皐（裏月、何言ってるんだよ。何かさつきからおかしいと思ったら
……）

裏月（何、起きてみたら面白いことになってるからな。まさかこんな状況になってるなんて……………）

裏月がニヤニヤ笑っている事を僕は感じ取っていた。人事だと思っ
て……………

すると、突然小雪ちゃんが背中を合わせてきた。

皐「こ、小雪ちゃん？ど、どうしたの？」

小雪「ん、まあ、なんとなくかな？こうしていたいと思って…………でも、絶対に後ろ振り向かないでね。恥ずかしいから」

皐「う、うん。」

しばらく一言も話さず、ずっと温泉に浸かっていると…………小雪ちゃん
が立ち上がり、後ろから抱きついてきた。裸同士だからか、小雪
ちゃんの胸の感触が直に……………

皐「こ、小雪ちゃん？」

小雪「ねえ、皐。海での話んだけどね。」

皐「海での？」

小雪「うん、私は心が穢れてるって……………」

皐「うん、でも、僕はそんな事は関係ない。（僕もきつと同じことだから……………）」

小雪「分かってるよ。ただね。いつか私の過去を臯くんが知ったら、どんな風に思うのかなって、」

臯「小雪ちゃんの過去？」

あんまり小雪ちゃんは昔のことを話したがらない。特に中学校の時の話を……雪那もその事にあんまり触れないみたいだし……

小雪「きつと、知ったら軽蔑するよね」

臯「そんな事は絶対じゃないよ。僕は小雪ちゃんの全部が好きだから……」

そう小雪ちゃんに言うと、小雪ちゃんはそつと僕の頬にキスをした。

小雪「ありがとうね。もし話せる時があったら、話すね」

臯「う、うん。」

僕は脱衣所に戻ると、雪那がマッサージチェアに座っていた。何か気持よさそう。

雪那「あれ？もう上がったのか。って、顔真っ赤だけどどうしたんだ？」

皐「う、うん、ちょっとのぼせちゃって……………」

絶対に雪那にさっきの事言ったら……………怒られそうだから黙っておこう。

白雪「あれ？お姉ちゃん。どうしたの？」

私は脱衣所に戻ると白雪が待っていた。白雪は浴衣を着るのに苦戦していた。だから肩がずり落ちていたりしていた。

小雪「な、何が？」

白雪「なんか……顔真っ赤だし、のぼせたの？」

小雪「うっんと、何かここに来てから私素直になっちゃったかも……」

白雪「ふえ？」

小雪「と、とりあえず、浴衣着せてあげるから、ね、白雪」

白雪「う、うん。」

温泉での出来事は絶対に誰にも言わないようにしよう。何で私あんなに素直にキスしちゃったんだろ。やっぱり温泉の効果かな？

第10話 温泉で…… 後編（後書き）

六甲水「書いてて思ったよ。」

皐「何がですか？」

六甲水「いや、本当に二人とももう付き合っちゃえよ。」

皐「いきなりですね。今回の話小雪ちゃんの過去に関わってきそっ
だったじゃないですか。」

六甲水「まあね、小雪ちゃんと皐の出会いも実は違う感じだったり
するし……」

皐「へっ、どういっ……」

六甲水「やべっ、ネタバレだ。とりあえず、次回は裏月に頑張つて
もらうよ。ちなみに小雪ちゃんはおまりの恥ずかしさに鮮血先生の
方に行きました。追いかけなきゃね。」

皐「まあ、そうするけど、」

第11話 進む時間（前書き）

六甲水「旅行回の続きです。」

雪那「ずいぶんと更新が遅かったな」

六甲水「…………… DOG DAYSの方進めてました。」

雪那「作者、更新してないのかなりあるんじゃないのか?」

六甲水「休み中にはあげられるようにするよ。今回は裏月くんに頑張ってもらって予定です」

第11話 進む時間

温泉での出来事を臯はずっと悩んでいた。

臯（小雪ちゃん。一体どうしたんだろ？何か少し思いつめてるような感じがするけど、）

裏月（何だ。小雪の事を考えてるのか？）

臯のもう一人の人格、裏月が話しかけていた。ちなみに、今は自分の部屋で雪那はジュースを買いに行っている。

臯（裏月。裏月はどう思う？）

裏月（あん？小雪と一緒にお風呂に入ったことか？よかったじゃねえか。めったにない経験出来て、）

臯（いや、そういう事じゃなくって、小雪ちゃんが何だか思いつめているって事だよ。何だかこの間一緒に出かけた時からそんな感じがして……………）

裏月（別に気にすることないんじゃないのか？そういった事は本人が解決しなきゃいけないことだろ。俺らが助けてやるのはな……………）

臯（そ、そうだけど、）

裏月（というか、お前は小雪のことが好きなのか？）

臯（そ、それは……………小雪ちゃん、可愛いし、それに一緒にいると

何だか心が暖かくなるような気がして……………)

裏月(やっぱり好きなんじゃないのか?泣かせたりしたら兄貴のほづがうるさそうだけだな)

皐(そ、そうだけど、)

こうして、皐と裏月の話し合いは終わり、皐はとりあえず立ち上がった。

皐「そういえば、雪那。遅いな。どうしたんだろ?」

皐は少し気になり、探しに行こうとすると、何故か部屋のドアの方で顔を真赤にしていた。

皐「どうしたの?雪那」

雪那「皐。いや、何でもない。」

皐(どうしたんだろ?)

裏月(大方見当がつくがな)

皐(何?)

裏月(中野といちゃついてたんだろ)

皐(なるほど、納得。僕らももう寝ようか)

裏月(そうだな。)

こうして、騒がしい一日目が終りを告げたのだったが……翌朝、裏月はある出来事に巻き込まれるのだった。

そして、翌朝のことだった。

裏月「ん、もう朝か。それに、俺が珍しく臯より早く起きるとはな。」

たまにこういったことがあるが、二人にとっては既に慣れていた。だが、この日の朝だけは違った。

裏月「雪那は……まだ寝てるのか。俺の方ももう……ん？」

この時、裏月はあることに気がついた。何故か自分の布団の盛り上

がりがおかしかった。気になった裏月は布団をとってみるとそこには……………

裏月「な、なんだこれは……………」

そこにいたのは、浴衣を着崩しながら寝ている白雪の姿だった。着崩しているせいかな肩やら太ももやら丸見えだった。

白雪「んっ」

裏月（これは……………一体…………… 臯が寝ようとしたときいなかったよな。まさか……………俺が無意識の内にこいつを部屋に連れだしたり……………いや、それはない。とは限らないか。これは一体どういう事だ。）

裏月が必死に状況を整理していると……………白雪が寝言を言い出した。

白雪「ん、お姉ちゃん。」

裏月（何だ？小雪の夢でも見てるのか？）

裏月はこの時、気がついていなかった。白雪の頬に涙が流れていたこと………

とりあえず、裏月は部屋をでることにし、誰かが起きるのを待っている、雪那が部屋から出てきた。

雪那「臯、早いな。」

裏月「残念ながら、裏月だ。」

雪那「珍しく、朝からお前か。てか、こんな所で何やってるんだ？部屋に入ればいいのに」

裏月「いや、白雪が………てか、お前、白雪起こさなかったのか？」

雪那「ああ、そういえば言ってなかったな。しいの奴、寝相が凄いとつか、たまに寝ぼけて誰かの布団に入ってきたりするから………」

裏月「じゃあ、起こさなくていいのか？」

雪那「自然に起きるのを待ったほうがいいな。起こそうとしても起きないから」

裏月「はは、笑えねえな。」

こうして、二日目の朝が終わったのだった。

第11話 進む時間（後書き）

六甲水「どうだった？白雪の寝てる姿は？」

裏月「お前、そういうのやりたかっただけか？」

六甲水「まあね。楽しいじゃん。お風呂でばったりとか、布団に潜り込んだりとか。」

裏月「笑えねえ……………」

六甲水「ちなみに、白雪ちゃんはこの事知らないから」

裏月「ますます、笑えねえ」

第12話 肝試し（前書き）

六甲水「今回で旅行編が終わりだよ」

雪那「やつとか。それで今回は？」

六甲水「今回は肝試し。」

小雪「それじゃあ、私と皐くんのペアだね」

皐「そうだね」

六甲水「さて、それはどうかな？」

第12話 肝試し

旅行の二日目、小雪達は再び海で遊んでいる中、雪奈は一人旅館で
あることを考えていた。

「暇ね。明日になれば普通の日常にもどるけど………最後ぐらい皆
に思い出の一つくらい提供しなきゃね」

雪奈はそう思いながら、ある場所へある準備をしに向かった。

夜、雪那たちは旅館の近くにある森に集合していた。理由は簡単だ。
雪奈に半強制的に集合をかけられたからだ。

雪奈「さて、皆集まったわね」

雪那「母さん。何で夜にこんな薄気味悪いところに来なきゃいけない
んだよ」

小雪「そうだよ。明日帰るんだから今日はゆっくり休みたいよ」

白雪「…………お姉ちゃんの言うとおりだよ」

皐「確かにこんな時間に暗い森に入るのはちょっと危ない気がするけど」

梓「そうだね。怖いし」

と霧生兄妹と皐と梓は言うのだが、一人だけ違った。

桜「ええー、面白そうじゃないですか。折角の夏なんですから肝試しの一つや二つくらいやりたいじゃないです」

雪奈「そうね。桜ちゃんの言う事に一理あるわ。」

雪那「たくつ、こういう時の母さんを説得するのはめんどくさいんだよな。じゃあ、多数決で決めよう。」

多数決でならきつと母さんも納得すると思っている雪那であったのだったが…………

雪奈「ちなみに参加しない雪那、小雪、白雪にはあとで好きな人に恥ずかしい過去をバラすけど、それでもいいのかな？」

雪那「あはは、やっぱり夏は肝試しだな。こゆ、しい」

小雪「そ、そうだね。何か私張り切ってきたよ」

白雪「う、うん。楽しみだね」

皐&梓（（一体、どんな恥ずかしい過去があったんだろ）（

こうして、雪奈の策略によって肝試しを行うこととなった六人だった。

ペアは雪奈が作ったクジで決められたのだが……

桜「宜しくお願いしますね。先輩」

雪那「ん、ああ、よろしく」

皐「よろしく。白雪ちゃん」

白雪（ごめんね。お姉ちゃん。本当にごめんね）

小雪「いいな。白雪。皐さんとペアになれて」

梓「私もゆきと一緒に良かったな」

小雪&梓「「はあ」「」

雪奈「それじゃあ、順番通りに行ってね。私は先で待ってるから」

第一ペア 雪那&桜

雪那「結構暗いな」

桜「そうですねか？これぐらいの暗さは平気ですよ。私。」

二人は真っ直ぐと森の中を歩くのだったが……とある疑問が雪那に浮かんだ。

雪那「なあ、ゴールってどこなんだ？」

桜「えっと、この森を抜けた先にお墓があるらしいですよ。そこがゴールとか……………」

雪那「明らかにゴールと違うよな。」

桜「いえ、ゴールですよ。確かお墓の近くに私たちが泊まってる旅館がありますから……………」

雪那「聞きたくなかったよ。」

さすがにあんな豪華な旅館にあんまり他の客がいない理由と何で予約をあつさり取れたか分かってしまった雪那であった。

桜「先輩って、怖いのが苦手なんですか？」

雪那「いや、そういう訳じゃないけど、一番怖がる奴が二人いるからな。その所為でここ最近怖いものに耐性が無くなってきたんだ。」

桜「ああ、なるほど。先輩、お墓が見えてきましたよ。」

雪那「まあ、普通なら行くべきだけど待っておく必要があるな。」

桜「そうですね。きっとその二人が遅らせますから」

雪那たちが行ってから数分経ってから出発した二人だったが……

皐「あの、白雪ちゃん？」

白雪「……………行きたくない」

白雪はさっきから皐の腕を掴んで前へと進むことが出来なかったのだ。さすがにここにずっといるわけには行かない皐だった。

皐「いや、ここでジツとしているよりは前に進んだほうがいいよ。」

白雪「やだ。」

皐（どうしよう。さっきからこの調子だし、無理やり連れていくのは悪いし……………）
「うう時に裏月の出番だけど、寝てるし……………本
当にどうしよう）」

と皐が悩んでいるとそこに第三ペアの二人がやってきた。

梓「あれ？皐どうしたの？」

皐「あつ、丁度良かった。実は……………」

白雪「なるほどね。」

白雪は白雪の様子を見て大体の事情がわかった。白雪は白雪の頭を撫でた。

白雪「白雪。ほら、お姉ちゃんが来たからもう大丈夫だよ」

白雪「本当？」

小雪「うん、みんなで行こう」

白雪は皐の腕から離れ、小雪と手をつなぐ。

小雪「それじゃあ、四人で行こうか」

皐「そうだね。」

梓「大勢で行ったほうが怖くないよね。」

こうして、四人でゴールを目指す中、皐は小雪のあることに気がついた。それは小雪が少しだけ体が震えていたことだ。

皐（小雪ちゃんも怖いのに、白雪ちゃんのためにああやってお姉さんになってるのか。やっぱり小雪ちゃんって……………）

雪那と桜の二人は墓場の入り口で他のメンバーを待っていた。そん

な時に雪那がある事を聞いた。

雪那「桜ちゃんってよくこゆと親友になれたよな」

桜「え、どうしてですか？」

雪那「いや、小雪がああなって、桜ちゃんも傷つけた事があったのに……アイツの親友でいられるなんてって思ったから」

桜「……………そうですね。私も不思議です。あの頃の私じゃ小雪ちゃんと友達になれるなんて思っていましたけど、でも、事件が終わった後、小雪ちゃんが傷ついていることを知ったら、護らなきゃって思ってた……先輩もそうですね。」

雪那「俺は元からだ。アイツは危なっかしいからつねに一緒にいないと思ってたけど、あの時からはアイツの体を守るんじゃないかって、心も護らないといけないからと思ってたな。」

桜「先輩、さっきの言葉。セクハラですよ。特に体を護るって……」

雪那「うるさい。」

二人がそんな話をしているとやっと小雪たちがやってきた。

小雪「あれ？雪兄と桜。どうしたの？」

雪那「折角だから全員で行こうと思ってな。」

梓「それだったら、始まる前に言えばよかったのに……………」

桜「ごめんなさい。先輩。」

雪那「ほら、早く行って終りにしようぜ。明日は早いんだから」

こうして、白雪の初めての旅行は終わるのだった。けど、この夏から数カ月後の冬にあんな事が起きるとは誰も予想はしていなかった。

第12話 肝試し（後書き）

六甲水「というわけで旅行編終わりです。次回から日常編だね」

雪那「というか、最後の文章は何だ。最終回近いのか？」

六甲水「いや、全然。」

雪那「暫く掛かると」

六甲水「そうそう」

第13話 小雪と白雪の買い物(前書き)

六甲水「今回はまあ、前々からやろうと思っていた話です。」

雪那「何の話だよ?」

六甲水「さてね、ふふ」

雪那「なんだよその笑いは?」

六甲水「まあ、とりあえず、始まります。」

第13話 小雪と白雪の買い物

旅行から数日の日がたったある日の午後、私は雪兄にある相談をした。

雪那「はあ？しいの服を買いに行く？あいつ、いつもお前の服着てたから買う必要はないってお前言ってなかったっけ？」

小雪「うん、そうなんだけど。いつまでも私の服だ可哀想かなって、」

白雪はこの家に来てから数ヶ月経ったが、今持っている服は学校の制服とパジャマと雪兄が買ってあげた水着とこの家に来たときに着ていた白いワンピースだけだった。さすがにいつまでも私の服を着ているというのは嫌になるのかと思う。

雪那「まあ服ぐらいなら俺が買ってきてもいいんだけど……………」

小雪「うーん、私もそれを考えたんだけどさ」

雪兄の女性の服を選ぶセンスはそれなりにいいので頼むのはいいのだが……………今回の場合はそうはいかなかった。何故なら……………

小雪「実はさ、白雪って下着の類……………主にブラジャーなんだけど無いんだよね。」

雪那「……………待て、色々と待ってくれ。下はあるんだけど上がないという話でいいんだよな」

小雪「うん、下はさすがにあるんだけどね。上のほうがね……………」
「全くないんだよ。」

雪那「あいつにその事を話したりしたのか？」

小雪「うん、聞いたら……………」『お姉ちゃんって昔胸が小さかったからずっとブラ付けてないからずっとピーだったから、私もその影響で無いんだよ』って、これって私の責任だよな。」

雪兄は白雪の詳細について前から知っていたのでそういった事は理解できているので話すことが出来るが……………」

雪那「あー、お前もそんな時あったな。母さんに注意されて買い始めたけど……………」お前のブラ貸せばいいじゃねえか」

小雪「ふふ、中学生くらいの私のサイズ知ってる？AAだよ。なんと今はCに成長したけど……………」白雪の場合はそうはいかないよ。あそこの成長が止まってるせいか今は何とかAだけど……………」これって私の責任だよな。」

雪那「ん、まあ、そうなるけど……………」さすがに色々とまずいからな。」

小雪「うん、それに白雪の場合、付けなくっても問題ないよって言うってたから……………」お姉ちゃんとしてやっぱりなにか言ったほうがいいよね。」

雪那「そうだな。今回はかりはお前に任せる。金は俺が出す。買ってこい」

白雪「うん」

というわけで私は白雪を連れだして、都内のデパートに来ていた。

白雪「お姉ちゃん？どうして今日は買い物に誘ったの？」

白雪「うーんっと、たまには姉妹水入らずで買い物とかもいいかなって、服とか下着とか」

白雪「そうだったんだ。ありがとうねお姉ちゃん。でも、折角だから雪お兄ちゃんと一緒に行きたかったね。兄妹水入らずで」

小雪「あ、そ、そうだね。」

さすがに雪兄も連れていくのはまずい。というか雪兄が女性用の下着売り場とか彷徨いてて知り合いに……特に梓姉に見られたらまずい気がするから……今回は私がんばらないと……

小雪「雪兄は家事で忙しいから、母さんも帰ってくるの遅いし、今度一緒に行こう。」

白雪「うん」

白雪は嬉しそうにしていた。とりあえず白雪の嬉しそうな顔を見ると元気が出るから、お姉ちゃんとしてしっかり選んであげないと……

……

小雪「それじゃあ、最初は洋服見に行こう」

白雪「うん」

しばらくの間、白雪の洋服を選んでいた。元は私だから同じ感じでいいと思っていたのだが……………それでもかなり苦労したのだった。

白雪「白より淡い水色がいいな。」

小雪「そう？白のほうが似合ってると思うんだけど……………」

白雪「白だとお姉ちゃんと被っちゃうから……………洗濯分ける時とか大変だから……………」

小雪「そうだね。それに同じ服だと今までと変わらないから……………これでいいかな？」

私は白雪にチェックビスワソピの青を選んであげた。白雪は嬉しそうに試着してくれて一着目は決まった。後は今は夏なのでキャミソールなどでもいいかなと思い、白雪に好きな色を選ばせて服の方は何とか終わった。

小雪「それじゃあ、次下着でも見る？」

白雪「うん、」

下着の方も白雪の好みで決めて何とか買い物は終わったのだが……………大変なことがその日の夜起きたのだった。

白雪「お、お姉ちゃん。ごめんなさい。」

夜、私は部屋で本を読んでいると白雪がビクビクしながら部屋を訪ねてきた。

小雪「どうしたの？」

白雪「あのね、お姉ちゃんが大切にしてたコップね、その、割っちゃった。ごめんなさい。」

白雪は泣きそうになりながら謝ってきた。とりあえずリビングに降りて割れたコップを見ると見事に割れていたのだった。

小雪「あー、見事に割れてるね。」

白雪「ごめんね。」

小雪「うん、大丈夫だよ。コップ割ったくらいで怒らないから」

白雪「え、でも、大切にしてた奴だよ。怒らないの？」

小雪「ん、白雪が怪我なかったからそれで私は安心だよ。片付けは私はやるから白雪はもういいよ。」

白雪「あ、私も……………」

小雪「白雪はいいって言ってるでしょ」

つい、大声で怒鳴ってしまった。白雪の方を見ると何だか怒っていた。

白雪「割ったのは私だから、片付けるのは私だよ。なのに怒ったりしないでいいじゃん。」

小雪「だから、片付けるのは私だけでいいから」

白雪「むー、お姉ちゃんやっぱり割った事怒ってる。」

小雪「だから、怒ってないって、」

白雪「いいよ、もうお姉ちゃんの事知らない」

小雪「私も知らない。」

こうして私たちは初めて姉妹喧嘩をしてしまったのだった。

第13話 小雪と白雪の買い物（後書き）

六甲水「何というか、気になるところで終わらせちゃった。」

雪那「というか、下着の方は前から勝負下着とか言ってたんだけど？」

六甲水「やろうと思ったけど、ピーの話をやったらいいかなって」

雪那「あっそ、」

紅月「というか、次回はどうなるんですか？」

瑠璃「さあ？姉妹喧嘩は手を出したら痛い目にあつからな。」

雪那「まあ、そこはアイツの出番だろうね。」

瑠璃「そうね」

第14話 雪那の苦難（前書き）

六甲水「今回は14話だね。」

雪那「というか、一ヶ月くらいだな。」

瑠璃「そうね。」

六甲水「あの、何の話かな？」

雪那「やっと更新だな。」

瑠璃「何やってたのかしら？」

六甲水「色々と忙しくって、」

第14話 雪那の苦難

教室で雪那は俯せになっていた。

皐「ねえ、義亮。雪那の奴どうしたの？何か落ち込んでるけど……」

皐は近くに座っている義亮に雪那の現在の状況について聞いてみた。

義亮「いや、朝からあんな感じだぞ。それにずっとため息ついてるし……」

皐「何かあったのかな？」

霧夜「おはよう。て、雪那の奴どうかしたのか？」

と別クラスから遊びに来た霧夜が教室に入ってからの第一声がそれだった。やっぱり嫌でも目に付くものなんだ。

皐「朝来てからずっとこうなんだよ。」

義亮「アイツの場合、あんまり落ち込んだりする所見たとき無いからな。あるとしたら気疲れとか……」

霧夜「でも、今回はちょっと様子おかしいな。こっ………女の子に振られたとか……」

皐「あはは、そんなこと………ありそうかも。」

義亮「ああ、あいつがああまで落ち込む理由を作った奴は俺たちも

知ってる奴だな。」

皐と義亮は一人の少女を思い浮かべた。雪那が好意を寄せているクラスメイトの一人を……そして雪那がアソコまで落ち込ませている原因を……

皐「雪那。振られたんだ。」

義亮「てつきり両思いかと思ったのにな。」

霧夜「俺らで慰めようか？」

と三人がそんな話を話していると、教室のドアから雪那が好意寄せている少女＋落ち込ませている原因である中野梓が入ってきた。

梓「おはよう。って三人ともどうしたの？私を見て『ああ〜着ちやったよ』って顔をして……」

義亮「いや、中野がどういう風に振ったのかなって……」

霧夜「中野。今日来ないほうが良かったかもね。」

梓「何か来て早々にそんな事を言われたのは初めてだよ。皐、何かあったの？」

皐「いや、実は雪那が……」

皐が雪那の事を指差すと梓は雪那の今の状況を見て驚いていた。

梓「ゆ、雪。どうかしたの？」

梓は急いで雪那の所へと向かうと雪那は顔をゆっくりあげた。その顔は何だかものすごく疲れている顔だった。

雪那「梓か。ちょっとな。」

梓「ちょっと所じゃないよ。何か顔が凄いことになってるよ。」

雪那「あゝ、確か今日って一時間目自習だっけ？出来ればその時に話したんだけど……………」

梓「う、うん。」

一時間目は自習で、いつものメンバーで図書室で渡されたプリントを終わらせ、雪那が何でこんなに疲れた顔をしているかの理由を聞いた。ちなみに霧夜は別クラスのため来れなかった。

皐「それで何でそんなに疲れてるの？」

雪那「んと、簡単に言うところゆとしいの二人が喧嘩した。」

義亮「喧嘩って……あのいつも仲良しの二人がか？つっても普通の姉妹喧嘩だろ。それだけで……」

雪那「義亮。お前には分からない。俺が朝起きたらどんな状況かを……」

皐「どんな状況だったの？」

早朝

今日の朝食当番はしいだったため少しゆっくりと起きだした雪那だったが、リビングに入って机に並べられた朝食のメニューに驚愕した。

朝食メニュー

普段（白雪が作った場合）

白いご飯 味噌汁 焼き魚 お吸い物

今日

白いご飯 にぼし

雪那「……………何があつたんだ。」

白雪「あ、お兄ちゃんおはよう」

制服にエプロンを付けた白雪が台所から出てきた。普段と顔色も変わらないから病気ではないらしい。

雪那「ああ、おはよう。なあ、白雪。今日の朝食どうしたんだ？」

白雪「ん？何かおかしい？」

雪那「ああ、何でおかずが煮干だけなんだ。」

白雪「いつもどおりだけど……………」

やばい、白雪が壊れたのか？でも特に熱があるわけじゃないし……………

そんなことを考えていると小雪が起きだしてきた。だが、小雪の様子もいつもと違った。それは……………かなり機嫌が悪そうだった。

小雪「……………おはよう」

雪那「ああ、おはよう。こゆ。」

白雪「……………」

小雪と白雪が目を合わせた瞬間、しばらく沈黙が続いた。そしてその沈黙がずっと続いたのだった。

雪那「わかるか？機嫌が悪い二人に挟まれて煮干を齧っている俺の気持ちか……………」

義亮「ごめん。わからない。」

皐「僕も」

梓「しっかりご飯は食べたんだ。」

憂「でも、本当に珍しいね。小雪ちゃん達が喧嘩するなんて……………」
憂だけが真剣に考えてくれただけ少し良かったと思う雪那だった。
雪那は頭を掻きながら答えた。

雪那「俺も原因がよく分からないだよ。分かれば何とかできるかもしれないんだけど……………」

梓「そうだね。こういう時は雪が聞くよりは違う人が聞いたほうが話してくれるかもよ」

梓の意見を聞いて、雪那はしばらく考え出した。そして思い浮かんだのは……………」

雪那「じ〜」

臯「雪那。なんで僕の方を見るのさ。」

雪那「臯。頼んだ。」

臯「いやいや、待ってよ。僕じゃ力不足かもしれないよ。」

雪那「頼む。お前だけが頼りだ。後で埋め合わせしてやるから」

雪那は必死に頼み込むこと一分。臯は渋々とその役目を引き受けるのだった。

第15話 姉妹仲直り（前書き）

六甲水「今回でやっと二人が仲直りです。」

雪那「ちゃんと出来るんだな」

六甲水「もちろん、いちゃつかせながら」

雪那「心配だな」

第15話 姉妹仲直り

雪那に小雪と白雪の喧嘩の理由を聞いてくるように頼まれた皐は携帯で小雪を学校内のベンチに来るようにとメールを送った。

皐「これで大丈夫かな？」

すると直ぐに返信が着た。

小雪『もしかして……………告白？』

メールの内容を見て、反射的に転びそうになった皐。

皐「何か勘違いしてるけど……………もう一回メールだ」

『違うよ。ちょっと聞きたいことがあるから……………』

と送ると今度はこんな返信が……………

小雪『聞きたいことって？私が皐くんの事をどう思っているからなら……………大好きだよ。』

皐「どうしよう。喧嘩が原因でこんな返事を送っているしか思えないよ」

裏月『いや、普段からこんな感じだろ』

と裏月は心のなかでツッコミを入れるのであった。

数十分後、小雪がかばんを持って来てくれた。

小雪「お待たせ。それで話って？」

皐「あ、うん。その白雪ちゃんと何かあったの？」

とりあえずストレートに聞いてみることに、すると小雪は少しだけ悲しそうな顔をした。

小雪「うん、ちょっと喧嘩しちゃって……………」

皐「良かったら話し聞かせてくれないかな？助言くらいなら出せるよ。」

小雪「うん、実はね……………」

小雪は白雪と喧嘩した理由について話した。そして話し終わると…

……

皐「大切にしていたコップを割っちゃったんだ。それでつい白雪ちゃんに怒鳴っちゃったんだ。」

小雪「うん、本当は怒るつもりはなかったんだよ。でも、あのコップには思い出があつてね。」

皐「思い出？」

小雪「えつとね、中学生くらいに私ちよつと入院してて、」

皐「入院？小雪ちゃん病気だったの？」

聞いたことのない話だったのか皐は小雪を心配そうに見つめると、小雪は直ぐに答えた。

小雪「まあ、検査みたいなのでね。その時に雪兄がお見舞いにくれたのがそのコップ。その時の私は凄く嬉しかったんだよ。だからなのかな。白雪がそれ割っちゃったとき、思い出も一緒に割られちゃったのかなつて思つて………ふえ？」

小雪が話し終わると、皐は小雪の頭を撫でた。

皐「コップと一緒に思い出が割れちゃったか。そんな事ないと思うよ。だって小雪ちゃんの思い出はここにあるんだから」

皐はそう言つて、小雪の胸を指さした。小雪は直ぐに笑顔になった。

小雪「そうだね。思い出は私の中にあるんだよね。話に乗ってくれてありがとうね。 皐くん。」

皐「どういたしまして」

校舎の影に雪那は二人の話を聞いていた。

雪那「たくっ、それが理由かよ。こゆもこゆだけど、しいもしいだな。」

白雪「あれ？お兄ちゃん。そんなところでなにやってるの？」

雪那「いや、別に………しい、こゆと仲直りしたいか？」

白雪「え、うん。」

雪那「なら、取っておきな奴があるぜ。」

家に帰ると、雪兄と白雪の二人は先に帰っていた。

小雪「ただいま」

私はリビングに入ると机の上の一つのコップが置いてあった。それはあの時割ったコップと同じものだった。

小雪「これ……………」

すると、コップの下に一枚の手紙が置いてあった。それは…………

『ごめんなさい。白雪より』

と可愛らしい字で書かれていた。ふっとリビングの扉をみるとそこには白雪がいた。

白雪「お、お姉ちゃん。」

小雪「……………白雪。ありがとうね。あと、白雪にもプレゼント」

私はかばんの中に入った物を白雪に見せた。そのプレゼントは……
…私と白雪の大切な思い出の一つになる一つの……………

皐『それで仲直りできたの？』

雪那「ああ、何とかな」

雪那は自分の部屋で皐と電話をしていた。

皐『これくらいのことだったらいつでも力になるよ。』

雪那「おう、その時はまた頼むわ。ああ、それと……人に妹の胸を指さすのは……あれ、セクハラだからな。」

皐「えっ、何でその事を……もしかして見てたの?」

雪那「さあてな。」

第16話 白雪の初恋 前編（前書き）

六甲水「久しぶりの更新です。」

雪那「メチャクチャ久しぶりだな」

六甲水「いやー、しばらくは日常編やろうと思ったんだけど、思い
つかなかったから……………」

雪那「それで、今回の主役は白雪なのか？」

六甲水「まあね。しばらくは白雪が主役かな？」

第16話 白雪の初恋 前編

ある日の午後、白雪は一人で商店街で買い物をしていた。

白雪「えっと、大根と人参とお肉と……うん、頼まれてたもの買い終えたかな。そうだ、折角だからお姉ちゃんたちにアイスでも……」

そう思い、歩き出そうとすると、近くの路地から騒がしい声が聞こえた。少し気になり、こっそり覗き込むと……そこには何人かの不良が倒れていた。そして倒れている不良たちの中心に立っていたのは……臯くんだった。

白雪「あれって、臯くん？もしかしてここで喧嘩してたのって……臯くん？」

すると臯らしき少年がボソツと呟いた。

臯「たくっ、いじめる相手間違えやがって……というかアイツ、助けるならお前がやればいいのに……まあ、殴られたシヨックで俺が出てきちまったからな……」

白雪「何だか喋り方がおかしいけど……臯くんじゃないの？そういうえばあの人……夢で会ったような」

白雪は極稀に他人の夢の中に入り込むことが出来る。少し前にそれが起きてその時に臯に似た人物と出会った覚えがあった。

白雪「ちょっと、気になるけど……声かけたほうがいいよね」

そう思い、声をかけようとするといつの間にか臯がこっちに向かって歩いてきた。そして出会った。

白雪「あっ、」

臯「お前は……………白雪か？」

白雪「えっと、臯くんだよな。」

臯「まあそうだな。とは言っても臯であって臯じゃないな。」

白雪「どういふこと？」

臯「とりあえず、ここじゃアレだから……………別の場所で話そうか」

白雪は臯の後をくつついていった。白雪達がその場から離れてから数分後、不良の一人が立ち上がり……………

不良「あの野郎。許さねえぞ。」

不良は携帯を取り出し、電話を掛けた。

不良「おい、ちょっと手伝え。」

近くの公園に来た二人はベンチに座ると、白雪は聞いてきた。

白雪「それで、貴方は誰なの？」

皐「あん、というか俺はお前のこと知ってるぜ」

白雪「えっ？」

皐「雪那の妹だろ。それにちょっと前に俺の夢の中に入ってきたことあるだろ」

白雪「じゃあ、やっぱりあの時の……」

皐「ああ、そつだ。というか夢での出会いなのに、よく覚えていたな」

白雪「再会したからかな？普段は覚えておくことができないけど…

…そういえば貴方のことなんて呼べばいいのかな？」

皐「今度あった時に考えておくとか言っただけだったか？」

白雪「そういえば、そうだったね。じゃあ、裏月くん」

何となく思い浮かんだ名前です。裏月くんは微笑んだ。

裏月「いい名前だな。それでお前は俺は誰なのか知りたいんだろ。教えてやる。俺は……皐の裏の人格だ。」

白雪「裏の？」

裏月「ああ、いわゆる二重人格みたいなものだ。昔に皐がひどいイジメを受けてた時があったな。その時に俺が生まれた。」

白雪「そうなんだ。」

裏月「そうなんだって、何か普通の反応だな。」

白雪「うん、私も似たような存在だから。」

裏月「どういうことだ？」

白雪は裏月に自分の存在について話した。白雪は昔の小雪であり、小雪は中学時代にいじめられていたことがあり、いじめがきっかけで心が追い詰められ、その結果いじめていた人達を傷つけた。だが、それは兄である雪那が止めたことで終わり、新しく生まれ変わるために白雪から小雪となった。白雪もその事がきっかけでもう一つの人格となろうとしていたが、小雪は過去を忘れずに今を生きている

ことを知り、消えようとした時に奇跡でこうして存在するようになったと裏月に話した。

裏月「臯と小雪は似たようなもんだな。いや、俺と白雪もだな。」

白雪「そうだね。あとさっきの話、臯くんには黙ってて、臯くんには知られるとお姉ちゃんには嫌われると思ってるから、」

裏月「安心しろ。臯はまだ目覚めてない。それにアイツが知ったところで小雪の事を嫌いになるわけ無いだろ。」

白雪「そうだね。」

裏月と白雪が楽しそうに話している所をじっと見つめる集団がいた。

「あいつ、あんな所にいやがった。」

「どっつするんだ？」

「隣の女を人質にとって、アイツをリンチだ。」

それはさっき裏月が殴り倒した不良だった。

一方その頃、霧生家では……

小雪「お腹空いたよ〜」

雪奈「そつね。白雪ったらなにしてるのかしら?」

雪那「携帯に電話しても、電源切ってて出ないな。俺少し探してくる。」

小雪「雪兄、白雪には甘いよね。」

雪奈「雪那は重度のシスコンだから」

雪那「シスコンじゃないから……」

雪奈「とりあえず、私も六華くんたちに探させるように電話しておくから……」

雪那「分かった。母さんとこゆは留守番よろしくな。」

雪那は帰りが遅い白雪を探しに出かけるのであった。

第16話 白雪の初恋 前編（後書き）

六甲水「という訳で、白雪と裏月の再会です。」

裏月「というより、本編で二回ぐらい会ってるだろ」

六甲水「ちゃんと会ってないじゃん。夢の中とおふとんの中で……」

裏月「それ、かなり卑猥だぞ」

六甲水「というわけで、次回は後編です。裏月は何で喧嘩をしていたのかは次回で明かされます」

第17話 白雪の初恋 後編（前書き）

六甲水「後編スタート」

雪那「やっとだな。」

六甲水「やっとって、そこまで日にち経ってないからね。」

第17話 白雪の初恋 後編

白雪「そういえば、何で喧嘩なんてしてたの？」

公園で裏月と親しくなった白雪が喧嘩の理由を聞いてきた。裏月はめんどくさそうにしながら……

裏月「……あいつらが捨て猫をいじめてて、それをたまたま見かけた臯が止めに入ったんだけど、あの不良どもに殴られたショックで俺がこっちに出てきて、ボコツたんだよ」

白雪「……そうだったんだ。でも私はあんまり暴力とか嫌いだな。」

裏月「昔を思い出すからか？」

白雪「ううん、昔のこともあるけど、暴力という事自体嫌いだから……だから裏月くんにはあんまり喧嘩して欲しくない。」

白雪は真っ直ぐな瞳で裏月を見つめる。裏月はため息を付き、

裏月「……そんな目で見られると喧嘩とかどうでも良くなったな。約束してやるよ。あんまり喧嘩はしない」

白雪「絶対じゃないんだ。」

裏月「まあ、必要なときにやるだけだ。」

白雪「………そっか、」

裏月「ほら、もう暗いから送ってやる。」

裏月はそう言って白雪に手を差し伸べた。白雪はその手を見て、おそろおそろ裏月の手を握ろうとした。

だが、そんな時だった。

「やっと見つけたぜ。」

突然裏月と白雪の周りを囲む何人かが現れたのだ。

裏月「何だお前ら、さっきぶっ飛ばした不良じゃねえか。懲りねえな。」

「あそこまでコケにされたんだ。黙ってなんかいられるかよ。それに今回はさっきとは違っぜ。さっきは三人だったが、今回は十人だ。覚悟しろよ。」

裏月「たくっ、めんどくさい連中だな。何人集まろうが関係ねえな。全員ぶっ飛ばすまでだ。」

裏月は不良の一人に接近し、殴りかかろうとした。だが、

白雪「きゃあ」

裏月「白雪!」

不良の一人が白雪の首筋にナイフを当てていた。

「おっと、動いたら、お前の可愛い彼女の顔が一生消えない傷がつくぜ。」

裏月「ちっ、頭悪い奴の考えそんなことだな。」

「へへ、さて、妙な動きをするなよ。お前は黙って俺たちにリンチされな。」

白雪「裏月くん、私のことはいいから、」

裏月「いや、お前は絶対に怪我一つさせない。それにさっきお前の眼を見てたら……お前を守るために喧嘩するっていうのも悪く無いと思っただ。だから、お前が怪我されたら折角決意したことが台無しになるからな。」

白雪「……裏月くん」

「いちやついてんじゃねえぞ。てめえは黙ってリンチされてる。」

不良のリーダーが裏月の顔を思いつきり殴った。

裏月「ちっ、あんまり怪我させちまうと臍に悪いな。」

「余裕ぶっこいてんじゃねえぞ。お前ら、こいつバットで殺っちまうぞ。」

不良たちがバットを取り出すと裏月に向かって振りかざした。

裏月「さすがにバットで殴られるとやばいかもな。」

雪那は不良の一人を睨みつける。

雪那「いつまでそんなもん向けてるんだ？殺すぞ。」

「ひ、ひいいいいいいいい」

不良は雪那の脅しにビビり、白雪を離した。白雪は裏月の所へ駆け寄った。

白雪「……裏月くん、」

裏月「怪我はないようだな。さてと、さっきは調子にのってくれたな。覚悟は出来てるだろうな。」

指を鳴らしながら不良たちに迫る裏月。だが、雪那はそんな裏月の肩をつかんだ。

雪那「もういいだろう。」

裏月「なんで止めるんだ？こいつらぶん殴らねえと……」

雪那「こいつら、この街でこつ言ったことを行った時点で、もう終わりなんだよ。」

すると公園の入口から何十台ものバイクに乗ったレディースがやってきた。

「ひ、ひい、なんだよ。こいつらは……」

不良のリーダーが怯えていた。するとレディースの一人が雪那に駆け寄ってきた。

桜「先輩、おまたせしました。こいつらですね。白雪ちゃん苛めていたのは」

雪那「そうそう、後処理は任せたよ。桜ちゃん」

桜「はい、チーム雪柱の二代目リーダーの桜にお任せを」

その後不良たちは、レディースたちに連行されていったのだった。

裏月「なんだ？あいつらは？」

雪那「まあ、ちょっとした何でも屋みたいな感じかな。それじゃあ、俺はこの買い物袋持って一足先に帰ってるから、裏月、白雪のこと送っていけよ」

裏月「までよ。お前が来たんだから、別にいいだろう」

雪那「元々お前が送っていく役目だろう。俺が奪ったダメかと思っ
てな。しっかり守れよ」

雪那はそう言い残して、さっさと帰っていくのであった。

残された裏月は雪那の言う通りに白雪を送っていくのであった。そんな時だった。

白雪「ねえ、裏月くんはこれからも喧嘩するの?」

裏月「多分な。」

白雪「理由は?」

裏月「……………理由か。そうだな。お前を守るために喧嘩する。」

白雪「でも、それだと怪我とかしたら、臯くんに迷惑かかるね。」

裏月「そうだな。まあ、仕方ないことだからな。今回も顔殴られたからな。」

白雪「だから、神様の奇跡、分けてあげるね。」

裏月「ん、んむ」

裏月が白雪の方を振り向いた瞬間、白雪は裏月にキスをした。そのキスは一瞬の出来事だったが、裏月にとっては長く感じた。

白雪は唇を離すと、顔を真赤にさせながら、笑顔で言った。

白雪「それじゃあ、送ってくれてありがとうね。」

白雪はそのまま走り去っていった。裏月は少しボォーとしていた。

裏月「いきなりキスなんてしやがって………何考えてやがるんだ」

こうして、白雪と裏月の出会いの夜は終わるのであった。だが、次の日、白雪の言っていた神様の奇跡はすぐに起こるのであった。

第17話 白雪の初恋 後編（後書き）

白雪「////////////////////」

裏月「たく、いきなりキスしやがって」

六甲水「そんな事言っつて、嬉しいくせに、」

裏月「ニヤニヤしながら言っつな。というか、シス那」

雪那「なんだよ。」

裏月「戦えよ。最終的に後輩に後処理任せやがって」

雪那「二人倒したじゃん。」

裏月「というか、いいタイミングすぎだ。絶対に狙ってたら」

雪那「気のせいだ。」

裏月「嘘つけ。」

六甲水「とりあえず、次回に続きます」

雪那&裏月「無理やり締めやがった。」

第18話 奇跡の代償 前編（前書き）

六甲水「一ヶ月ぶりの更新になります。」

雪那「何やってたんだよ。」

六甲水「いや、早めに続き書こうと思ってただけだね。」

雪那「なんだよ。」

六甲水「新作書いてたり、ノクターン書いてたり、さらにはエクシリアを頑張ってたリ……」

雪那「絶対にゲームで書く時間削ったよな。」

六甲水「まあ、その話は置いていて、今回はやっと裏月の完全登場です。」

雪那「てか、タイトルが不吉なんだけど、」

第18話 奇跡の代償 前編

この前の不良たちとの喧嘩騒ぎの次の日、俺は何故か臯に校舎裏に呼び出されていた。

(あいつ、いきなり呼び出したけど……………一体どうしたんだ？今日なんか遅刻したし……………まさか……………)

俺はおかしな想像をした。それは……………

(まさか……………こゆと付き合うことになったりとか……………いやでも、こゆは今朝はおかしな感じはなかったし……………)

「あつ、雪那。」

おかしな事を考え始めていると、後ろから臯に声をかけられた。とりあえず臯の用件を聞かないといつまで経ってもおかしな想像をしてしまう。

「臯。突然呼び出してどうしたんだ？」

「あ、うん。実は……………その……………」

臯はなんだか思いつめた顔をしていた。本当に何だか今日の臯は様子がおかしい。一体どうしたんだ？

「雪那にしか頼めないことなんだ。聞いてくれるかな？」

「まあ、別にいいけど……………ん？」

少しだけおかしな視線を感じた。辺りを見渡すと……見覚えのある姿が校舎の壁の裏でジッとこっちを見つめていた。

「こゆ、何してるんだ？そんな所にいないで出てこい」

とりあえず声をかけて見ることにした。するとこゆは顔を真赤しながら泣いていた。

「うう、やっぱりムギ先輩の言うとおりだった。臯が……雪兄に告白……」

何かおかしな勘違いをしてるみたいだ。

「臯。」

「え、何？」

「ちょっとこゆの耳元で『大好き』って言ってくれないか？」

「いや、なんで？」

「何かちよつと暴走してるから……」

「えつと、小雪ちゃん？」

「な、何？臯くん。」

臯はそつと小雪の耳元でさっき言った言葉を伝えると……小雪は顔を真赤にしていた。

とりあえず小雪に誤解を解くこと五分。小雪を交えて話を再開できそうだ。

「それで用件は？」

「あ、うん。実は……えっと、その前に白雪ちゃんは今日は……」

「白雪？今日は何だか体調悪くて、お休みだよ。」

白雪は昨日、あんなことがあったせいなのか熱が出てしまい、今日は家でゆっくり寝ている。それにしても皐の用件は白雪が関係することなのか？もしかして……ふっと俺はこゆを見た。

「こゆ。悪いけど、しいのこともあるし、先に帰っててくれないか？母さん、遅くなるみたいだし」

「ん？まあいいけど……」

こゆにはあんまり聞かれてたくない話かもしれない。

「それじゃあ、先に帰るよ。」

こゆが帰るのを見ると、話を続けた。

「裏月に何かあったのか？」

「うん、実はね。僕の体から出てきたと言うか、ちゃんとした体を持つようになったと言うか……」

「一人の人間として出てきたのか。」

「うん。」

やっぱり思ったとおりだ。皐がこうまで思いつめた顔をするのは裏月のことが、小雪のことぐらいだ。でもなんでしいが関わってくるんだ？

「なんで実体出来るようになったか。裏月に聞いたら白雪ちゃんが

関係してるって……それで裏月、白雪ちゃんに何か影響はないか心配してたけど……ねえ、雪那。白雪ちゃんって一体……」

「うん、しいのことは……まだ話せないと言うか……話すと長くなると言うか……あとでちゃんと話すから……」

皐にはこゆの過去としいが生まれた理由については俺からは話してはいけない気がした。そのことは小雪が自分から言うべきだと思う。

霧生家では小雪が白雪の看病をしていた。

「もういきなり風邪なんてひいて……脱ぎ癖直したほうがいいよ」

「……うう、お姉ちゃんも脱ぎ癖あるよ。」

「あはは、そう言われるとそうだけど……でも汗も凄いから、体拭いたほうがいいよね。」

私は白雪の体を吹こうと思った瞬間、突然呼び鈴がなった。

「誰だろう？宅配便かな？ちょっと行ってくるね。」

「……うん」

玄関に行き扉を開く私……

「どちらさまですか？」

「白雪の様子を見に来たんだが……」

「えっ？」

訪ねてきたのは……皋くんとそっくりな男の人だった。誰だろう？
皋くんのお兄ちゃん？

「あの、どちら様で……」

「ああ、そういえば知らなかったな。俺は真堂裏月。皋の……
双子の兄だ。」

第18話 奇跡の代償 前編（後書き）

六甲水「とりあえず次回は早い内に上げる予定です。」

第19話 奇跡の代償 後編(前書き)

お待たせしました。第19話です。

雪那「てか、早めに上げるとか言っていなかったか？」

いや、なんというか……短編と新作を……

雪那「まあいや、今回は？」

前回の続きになりますね。基本的には白雪視点で

第19話 奇跡の代償 後編

お姉ちゃんが部屋を出ていってから五分くらい経ったが、未だに私の部屋に戻らない。

「どうしたんだろう？何かあったのかな？」

ちょっと心配になり、ベットから起き上がろうとしたがまだ調子が悪く、上手く起き上がれなかった。

「うう、まだ熱下がらない……………」

そんなことを呟いていると私の部屋の中にノックが響いた。

「お姉ちゃん？入ってきていいよ。」

私がノックに対してそう返し、扉を開けて入ってきたのは……

「……………調子悪そうだな。」

「……………り、裏月くん？」

私の部屋に入ってきたのは皐さんのもう一つの人格、裏月くんだった。

「よく、俺が裏月だって分かったな。」

普通の人だったらどっちが皐さんで、どっちが裏月くんか分からない。けれど私なら少し分かる。

「だって、臯さんと何だか感じが違うから。それにしても良かったね。私の神様の奇跡ちゃんと渡せたんだ。」

私がそんなことを言うと、裏月くんはちょっと怒った顔をした。何か変なこと言ったかな？私……

「お前、何で俺にその神様の奇跡とやら渡したんだ？そんなことしたらお前自身消えるかもしれないのよ」

裏月くんは私が神様の奇跡を渡して消えるんじゃないのかって心配してしてくれた。そうだよ。私がこうしていられるのは、その奇跡とお姉ちゃんの願いがあるからだよね。でも……

「大丈夫だよ。私は消えない。」

そう言いながら私は立ち上がり、裏月の手を掴んだ。そしてその手を私の胸に当てた。

「お、おい！」

「伝わってくるでしょ、私の心臓の音。私の体温。今、私がこうしているのが、私は消えたりしないってことが、だから、心配しなくてもいいよ。」

私は笑顔で伝えると、裏月くんはため息を付いて、笑顔でこんな事を言ってくれた。

「今回のその風邪のその代償のせいだろ。だったら、もうこんな無茶とかするなよ。また無茶したら心配するんだからな。」

「えへへ、うん、分かったよ。」

握り合った手と手から感じる温もりを私は絶対に忘れたりはいしなかった。今、気がついたんだもん。これが私の好きな人の温もりだつて……

「白雪、ただいま。裏月くんもお留守番してもらってごめんね。今晚の買い出しに行ってきたから……」

「あと、風邪薬とか買ってきたからな。」

「白雪ちゃん。お見舞いに来たけど……」

丁度良く、お姉ちゃんとお兄ちゃん。そしてお見舞いに来てくれた皐さんが私の部屋に入ってきて、今の現状を見て、凍りついていた。何でだろう？ 私は今、裏月くんの手を胸に当ててるだけだからそんなことは……

「え、えっと、お邪魔だったかな？」

「り、裏月。いくら何でも手が早すぎる気が……」

お姉ちゃんと皐さんは顔を赤くしている。お兄ちゃんと言つと……

「裏月。」

「あんだよ。シスコン」

「何、人の妹の胸を鷲掴みしてるんだ。表に出ろ。全力でぶっ飛ばす」

「はん、やってみろよ。シスコン」

何故かお兄ちゃんは怒りながら裏月くんと一緒に部屋の外にでていった。一体どうしたんだろう？

その後、戻ってきたお兄ちゃんたちは何故かボロボロになっていた。何があつたか聞いたけど裏月くんが

「お前には関係ない」

って言ってたけど、一体どうしたんだろう？その後、臯さんと裏月くんと一緒に夕飯を食べて私の初めての風邪は治るのであった。

そして、三日後、お兄ちゃんのクラスに転入生として裏月くんが転入してきたらしい。よかった。これで学校でも一緒だね。裏月くん。

第19話 奇跡の代償 後編（後書き）

裏月、君はなに白雪ちゃんの胸を鷲掴みにしてるの？

裏月「だから、あれは勘違いだ。あのシスコン、本気で殴りやがって」

「応言っておくけど、この小説はノクターンじゃないからね。」

裏月「お前、ちょっと拳で語り合う必要があるな。」

えっ、何で？

裏月「いいから来い」

第20話 月下美人（前書き）

今回はちよつと本編と少し繋がる番外編みたいなものをやります。

雪那「突然だな。」

いや、何か仕事中に月下美人の花のこと聞いて、ちよつと書きたくなつて……

雪那「そんな理由かよ。」

第20話 月下美人

それは私と白雪と一緒に家に帰る時のことだった。白雪がふつとなにか見つけたみたいだった。

「あつ、これ……」

「ん？どうしたの？白雪？」

「お姉ちゃん。コレ見て、『月下美人』だよ。」

「『月下美人？』なにそれ？」

「これだよ。」

白雪がそう言っつて、畑に生えている白い蕾を指さした。その蕾は何だか少し儂く見えてしまった。

「月下美人はね、夜にしか咲かない花なの。でも、その咲いた時の花は凄く綺麗なんだよ。」

「夜にしか咲かない花……何だか悲しいね」

「えっ、どうして？」

「だって、他の花は日が指している時に咲いてるのに、この花だけ夜にしか咲いている所見せないって……夜だと誰も見てくれないんじゃないかって……」

私がそう言つと、何故か白雪は悲しそうな表情をしていた。

家に帰り、白雪は雪兄に月下美人のことを話していた。

「月下美人か。そういえば、あつたよな。」

「うん、今度みんなで夜に見に行こうよ」

「まあ、いいけど、」

「わーい」

白雪は嬉しそうにしていたけど、私は夕方に見た白雪の悲しそうな表情をさせてしまったきっかけの言葉を言ったことに後悔していた。

（どうして、あの時私、あんなコト言つちやつたんだろ？あの月下美人と白雪を重ねちゃったからかな？）

私と白雪は元々は同じ人間。私が表の人格で、白雪は裏の人格。本来白雪は私が過去の罪を受け入れたことで消えてしまう存在。月の光が太陽の光に消されてしまうかのようなものだ。でも、白雪が言う奇跡で、今はこうして私の妹として存在できているけど……もしも、もしも何かのきっかけで白雪の存在が消えたら……月下美人みたいに朝になって花がしぼんでしまい、誰もそのことを忘れちゃつたら……

「お姉ちゃん？」

「どうしたんだ？なんか泣いてるみたいだけど……」

雪兄に言われて、気がつくとは涙を流していたみたいだった。どうしよう、あんまり心配掛けさせたくないのに……涙が止まらない……

「あつ、え、えっと、ごめん。ちょっと出かけてくる。」

「出かけるって、もう夕食出来るぞ。」

「大丈夫。すぐに戻ってくるから……」

私はそう言って、家を飛び出したのだった。

家を飛び出して、しばらく夜風にあたっている内にさっきまで流れていた涙がもう出なくなった。

「どうしよう。涙は止まったけど、今から家に帰るのはちょっと……」

……」

私はそうため息をつきながら言うと、夕方通った畑の所に来ていた。そこでは月下美人が綺麗に咲き誇っていた。

「……………綺麗」

「いきなり出かけたと思ったら……月下美人を見に来てたのか？」

突然声をかけられ、後ろを振り向くとそこには雪兄がいた。

「雪兄、どうしたの？」

「お前、様子がおかしかったからな。それで、どうしたんだ？」

雪兄は心配そうにしていた。いつも私達のことを気にかけてるけど、そのせいで臯くんとかにシスコンだって言われるの気が付かないのかな？

「お前、何か物凄く失礼なこと考えてたろ」

「気のせいだよ。ところで雪兄。例え話してもいい？」

「まあいいけど、」

「もしもね。白雪が何かの理由でいなくなったら、どうする？」

「……………お前の場合は？」

「えっ、私の場合？私は……………泣いちゃうかな。白雪は元々は私…」

…裏の人格みたいなものだけど、私はそのことは全然知らなくて、きつと消えても悲しくはなかったと思う。でも、今はああして、存在して、私の双子の妹になってる。もしも消えたりしたら……凄く泣いて、きつともう立ち直れないくらい……そんなことをさつき月下美人を見て、思っっちゃったんだ。つて、いたっ」

突然雪兄は私のおでこにデコピンをしてきた。そして、

「お前、馬鹿だろ」

「ふえ、馬鹿じゃないよ。」

「たくつ、何でそう暗い方に考えるんだよ。いくら例え話でも俺はしいも、こゆもいなくなったりさせ気はない。だつて、お前たちは俺の妹なんだからな。」

「……………やっぱり雪兄ってシスコンだね」

「だから、違つから」

何だか雪兄の話を聞いていて、さっきまで考えていたのが馬鹿らしくなってきた。そうだよな。白雪は絶対に消えたりしない。だつて……………こんなに私達を大切にしてくれるお兄ちゃんがいるんだもん。

「帰ろうつか。白雪も心配してるし、」

「心配させてたのは、お前だろ」

「そうだね。早く帰ろう。お兄ちゃん」

私が珍しくお兄ちゃんと呼ぶと、雪兄はすごく顔を真赤にさせていた。そういえば、お兄ちゃんって呼ぶのすごく久しぶりかも……
まあ、ちよとしたお礼と言っことで

第20話 月下美人（後書き）

とりあえず、ここ数話辺り存在について書いてたけど、次回辺りから、文化祭編を始めようと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7573p/>

けいおん Episode・SNOW

2011年11月15日21時04分発行